

The 85th Annual Conference of Japanese Educational Research Association

日本教育学会

第 85 回大会 プログラム

大会校：九州大学・九州産業大学

August 22nd, 24th, 25th



九州大学・九州産業大学 共催

九州教育学会 後援

日本教育学会

第85回大会プログラム

期間：2026年8月22日（土）、24日（月）、25日（火）

会場：九州産業大学（対面開催会場は九州産業大学のみ）

8月22日（土） オンライン開催

自由研究発表

ラウンドテーブル

社員総会（理事会）

23日（日） 移動日

24日（月） ハイフレックス開催（対面会場：九州産業大学1号館）

課題研究Ⅰ

自由研究発表（対面発表部会①）

総会・日本教育学会奨励賞授賞式

公開シンポジウム

25日（火） ハイフレックス開催（対面会場：九州産業大学1号館）

課題研究Ⅱ

自由研究発表（対面発表部会②）

課題研究Ⅲ

自由研究発表（対面発表部会③）

若手交流会

日本教育学会第 85 回大会のご案内

日本教育学会第 85 回大会実行委員会

委員長 元兼正浩

日本教育学会第 85 回大会は、九州大学と九州産業大学の共同開催形式とし（会場は九州産業大学）、2026 年 8 月 22 日（土）はオンラインで、24 日（月）、25 日（火）はハイフレックス（オンラインと現地会場）で開催いたします。開催方式としては、第 81 回～84 回大会にならい、1 日目（8 月 22 日）はオンラインにより「自由研究発表」（一般研究発表とテーマ別研究発表）と「ラウンドテーブル」を実施いたします。対面会場の九州産業大学への移動日（8 月 23 日）をはさみ、2 日目（8 月 24 日）と 3 日目（8 月 25 日）にはハイフレックスにて「課題研究」「シンポジウム」「総会」を開催いたします。

また、今大会では 8 月 24 日、25 日に試行として、対面形式での「自由研究発表」を 3 部会設けます。実行委員一同、充実した大会の開催に向けて準備を進め、福岡の地でみなさまをお迎えできるのを楽しみにいたしております。

なお、今大会は九州教育学会からの後援を受けて開催いたします。

I 大会案内

大会の概要

1. 開催日

2026年8月22日(土) オンライン開催

8月24日(月) ハイフレックス開催(対面開催会場:九州産業大学1号館)

8月25日(火) ハイフレックス開催(対面開催会場:九州産業大学1号館)

2. 開催方法

対面とオンラインによるハイフレックス方式

<対面会場> 九州産業大学1号館(福岡市東区松香台2-3-1)

<オンライン会場> 各分会のオンライン参加情報は大会参加申込者に8月20日(木)にご案内します。

3. 日程



I 大会案内



4. 実行委員会および連絡先

委員長： 元兼 正浩（九州大学）

副委員長： 松原 岳行（九州産業大学）、岡 幸江（九州大学）

事務局長・次長： 鈴木 篤（九州大学）、佐喜本 愛（九州大学）

委員： 池田 竜介（九州産業大学）、木下 寛子（九州大学）、木村 拓也（九州大学）、
佐藤 仁（福岡大学）、清水 良彦（九州大学）、鄭 修娟（九州大学）、
瀬平劉 アントン（九州大学）、竹熊 尚夫（九州大学）、立脇 洋介（九州大学）、
田上 哲（九州大学）、陳 思聡（九州大学）、中世古 貴彦（九州産業大学）、
花井 渉（九州大学）、関 楽平（九州大学）、藤田 雄飛（九州大学）、山田 政寛（九州大学）、
楊 川（九州産業大学）、Edward Vickers（九州大学）、
九州教育学会会員からの協力者

連絡先： 〒819-0395 福岡市西区元岡 744 九州大学イースト1号館気付

日本教育学会第85回大会実行委員会事務局

E-mail: kyushu2026@jera.jp

I 大会案内

目次

I 大会案内

[日本教育学会第 85 回大会のご案内](#)

[大会の概要](#)

[インフォメーション](#)

1. 参加方法・参加費等
2. 自由研究発表(一般研究発表およびテーマ別研究発表)
3. ラウンドテーブル
4. 若手交流会
5. 『発表要旨集録』
6. 昼食
7. 懇親会
8. クローク
9. 託児支援
10. Wi-Fi の利用
11. 自由研究発表・ラウンドテーブルの関係者の皆様へ
12. 交通アクセス [\(駅・バス停から会場までの構内地図\)](#)
13. [大会会場一覧 \(※建物内の教室配置図を含む\)](#)

[II 大会日程 \(※各ページへのリンクを含む\)](#)

III プログラム

IV 学会事務局からのお知らせ

I 大会案内

インフォメーション

1. 参加方法・参加費等

大会へは、2026年7月2日(木)～8月19日(水)の間に、大会HPに掲載する「参加申込フォーム」よりご登録いただき、下記の大会参加費をお支払いいただくことでご参加いただけます。参加手続きにつきましては、日本教育学会第85回大会HPの「参加申込」ページ (<https://jera-taikai.jp/jera85/participation/>) をご確認ください。

一般会員：3,500円

学生会員：1,000円

臨時一般会員：4,500円

臨時学生会員：1,500円

後援会員(九州教育学会会員)：3,500円

後援学生会員(九州教育学会会員)：1,000円

※お支払い後の返金は致しません。

※公開シンポジウムのみへの参加は参加費無料

※公開シンポジウムのみへの参加希望者は、2026年7月2日(木)以降に専用申込ページより参加登録をしていただきます(大会HPをご参照ください)。

2. 自由研究発表(一般研究発表およびテーマ別研究発表)

発表時間は、一般研究発表【A】、テーマ別研究発表【B】ともに一件あたり次の通りです。

個人研究発表 発表時間 25分+質疑 5分

共同研究発表 発表時間 50分+質疑 10分

※共同研究であっても口頭発表者が1名の場合の発表時間は、個人研究発表と同じです。

※発表の取消が生じた場合でも、発表時刻および発表順は変更しません。

3. ラウンドテーブル

ラウンドテーブルは、会員の創意で自主的に企画される研究交流・意見交換の機会です。

8月22日(土)の16:00～18:00にオンライン形式で開催します。16件の企画が予定されています。

4. 若手交流会

大会3日目8月25日(火)の16:15～18:15に、対面およびオンライン(Zoom)のハイフレックス形式で開催します。

I 大会案内

5. 『発表要旨集録』

企画を申込んだ方は、ラウンドテーブルの「原稿作成要領」（大会ウェブサイトに掲出）にしたがって発表要旨（『発表要旨集録』の原稿：PDF 2 頁分）を Web 登録にてご提出（アップロード）ください。分量オーバーの場合、3 頁目以降は掲載されませんので、ご注意ください。提出期間は、7 月 2 日（木）から 7 月 26 日（日）までです。締切厳守をお願いします。

* 『発表要旨集録』に掲載された内容は、科学技術振興機構(JST)の研究情報データベース「J-STAGE」において公開されます。

『発表要旨集録』の印刷・発行はしませんが、大会参加申込を 8 月 19 日（水）までに完了していただいた方に、オンライン大会会場への参加と『発表要旨集録』閲覧に必要なパスワードを 8 月 20 日（木）に送付させていただく予定です。

6. 昼食

8 月 24 日（月）および 25 日（火）とも、大学内の一部食堂は営業しております。

なお、大学付近にあるコンビニエンスストアの位置情報は、[12.交通アクセスにてお示ししているマップ](#)でご確認いただけます。

7. 懇親会

今大会では懇親会を開催いたしません。会場最寄りの JR「九産大前駅」から JR「博多駅」までは 15 分程度となっておりますので、情報交換や親睦会はそれぞれで行っていただければ幸いです。

8. クローク

本大会においては設置いたしません。博多・天神近辺のコインロッカー等をご利用ください。

なお、JR・地下鉄博多駅、地下鉄天神駅構内におけるコインロッカーの空き情報は、以下のサイト『ロッカーコンシェルジュ』にてご確認ください。併せてご利用ください。

・ JR 博多駅

https://www.akilocker.biz/mobile/map.html?locationId=JR_HAKATA&mapId=M52001&lang=1

・ 福岡市営地下鉄 博多駅

https://www.akilocker.biz/mobile/map.html?locationId=JR_HAKATA&mapId=M52002&lang=1

・ 福岡市営地下鉄 天神駅

<https://www.akilocker.biz/mobile/map.html?locationId=TENJIN&mapId=M59001&lang=1>

I 大会案内

9. 託児支援

昨年の大会と同様、大会2日目または3日目に開催される課題研究、シンポジウム、若手交流会において、司会、登壇者、指定討論者、話題提供者として現地で参加される方につきましては、当該企画に参加するための託児サービス（自宅でヘルパーを依頼する場合も含む。）を利用した際の費用の半額（1日あたり上限5,000円）を、実行委員会で負担させていただきます。また、現地では託児場所は用意しておりませんが、授乳等に必要スペースはご用意可能です。いずれも、ご利用を希望される方は、7月29日（水）までに実行委員会（kyushu2026@jera.jp）にご連絡ください。

10. Wi-Fiの利用

九州産業大学構内では、eduroam JP をご利用できます。ご自身の所属機関で eduroam アカウントを発行いただける方は、そのアカウントで Wi-Fi に接続できますので、事前にユーザ名やパスワードをご確認の上、お越しく下さい。eduroam の利用アカウントをお持ちでない方には、大会期間中、会場内で利用できる Wi-Fi 環境のゲストアカウントを発行し、受付でお伝えいたします。

11. 自由研究発表・ラウンドテーブルの関係者の皆様へ

(1) 学会大会運営にあたっての大会校からのお願い

日本教育学会第85回大会は九州大学と九州産業大学の共催で開催し、九州大学・九州産業大学に勤務する学会員、そして後援をいただいている九州教育学会の会員、さらに両大学の学生スタッフにて、準備・運営を行います。

電子的なシステム基盤の構築・運営は株式会社ガリレオの学会業務情報化サービスを中心とする専門の企業に依頼しているものの、限られた学会の予算を有効に活用するため、そうした企業との連絡等や各種事前準備、当日の運営にあたる学会員、九州教育学会の会員は、みな手弁当で、そして学生スタッフはわずかな謝金で、準備・運営にあたっております。

当日、そして事前のやり取りにおいては、会員のみなさまに行き届いたサービスを提供できない部分もあるかもしれませんが、限られた人的リソースにて全力で準備を進めておりますので、どうかご理解をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

(2) 自由研究発表会場への入室について

今年の自由研究発表は2026年8月22日（土）はオンラインで、24日（月）、25日（火）は対面形式で開催いたします。

8月19日（水）までの大会参加申込後、8月20日（木）にオンライン参加のための情報をご案内させていただきます。発表者のみなさまは、オンラインの場合も、対面形式の場合も、必ず各部会の開始時刻15分前に部会会場にお入り下さい。なお、一般参加者の方は自由に部会をご移動いただけますが、発表者のみなさまは、部会の開始時刻15分前から当該部会における討論終了時刻まで、その会場にとどまってい

I 大会案内

ただくようお願い申し上げます。(すでに他の多くの学会で慣例として定着しているように思われ、多くの方にとってはすでに自明のことではありますが、改めてこの点にご注意ください。)

(3) 対面形式での自由研究発表部会開設について

日本教育学会では新型コロナウイルス感染症の流行以来、自由研究発表やラウンドテーブルをオンライン形式にて開催してきました。こうした方式は感染症予防のみならず、仕事や家族の事情等により物理的な移動が困難な会員に発表・参加の機会を拡大することにも寄与し、新型コロナウイルス感染症の影響がかなり収まってきた現在も、一定の意義を持つものだと思います。

しかしながら、対面形式での研究発表とその後のディスカッションが、各発表者（とりわけ研究者としてのキャリアの浅い方）にとって大きな意義を持つことも事実であり、昨年の総会においても同様の指摘がなされました。そのことから、今大会では学会理事会からの依頼も鑑み、対面形式での自由研究発表部会を試行的に設けます。

具体的には、8月24日(月)・25日(火)の二日間、課題研究Ⅰ～Ⅲと並行する形で1部会ずつ合計3部会を開設するかたちとさせていただきます。

部会数の少なさについては様々なご意見があるかもしれませんが、例年の日程を大きく変えることは参加者側にとっても大会校側にとっても負担が大きいこと、オンライン形式が持つメリットに鑑みた際、対面形式での部会にどれほどのニーズがあるかわからないこと、そして限られた大会校スタッフにより多くの部会数を運営することは困難なこと、課題研究と同時に複数の部会を設けると、課題研究と部会とで参加者の人数が割れてしまう可能性があることなどから、まずは以上の部会数で試行的に行わせていただきます。

なお、申し込みにあたっては、①「オンライン形式での発表を希望」、②「対面形式での発表を希望するが、対面形式が難しい場合にはオンライン形式でも可能」、③「対面形式を希望し、対面形式が難しい場合には発表を辞退する」、という3つの選択肢を設け、ご希望を確認した上で受け付けを行いました。

その上で本企画は、とりわけ研究者としてのキャリアの浅い方にとって、対面形式での発表とその後のディスカッションの意義が大きいことを重視し、対面形式での自由研究発表部会の参加者決定の際、大学院生の方を優先した上、希望者が15名を超えた場合には抽選にて対面形式での部会発表者を決定いたしております。

(4) ラウンドテーブルにおける申込者側での Zoom 開設について

今大会においても例年同様、オンライン形式でラウンドテーブルを開催いたします。ただし、過去の事例においては、大会校側では Zoom の設定が自由にできない一方、ラウンドテーブルの申し込み者からは当日になって録画の希望などが寄せられ、十分に対応ができないことがあったと聞いています。しかし、大会校側で用意する各 Zoom の設定はそれ以前の自由研究発表のための設定を引き継ぐものでもあり、さらに Zoom のホスト権限も、すでに契約をしている学会員または九州教育学会会員が自らの Zoom 権限を用いて立ち上げている場合や、株式会社ガリレオを介してスポット契約をし、事前に細部の設定が行われ

I 大会案内

ている場合など、様々です。そのため、いくつかの部会では、事前に申し込み者の側で Zoom のミーティングを設定・開設していただいています。いずれの場合も、参加者のみなさまはご自由に各ラウンドテーブルへとご参加ください。

12. 交通アクセス

・バスでお越しの方

西鉄バス「天神中央郵便局前」から、本学最寄りのバス停まで都市高速経由で約 20 分

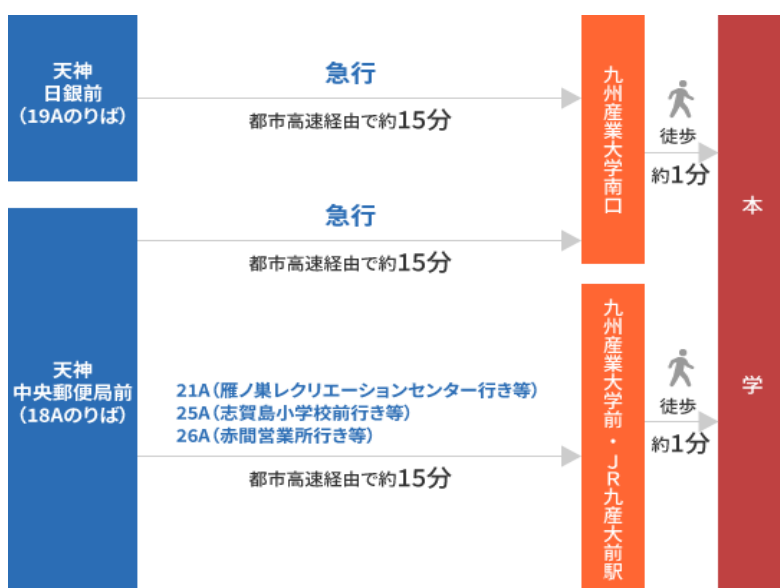
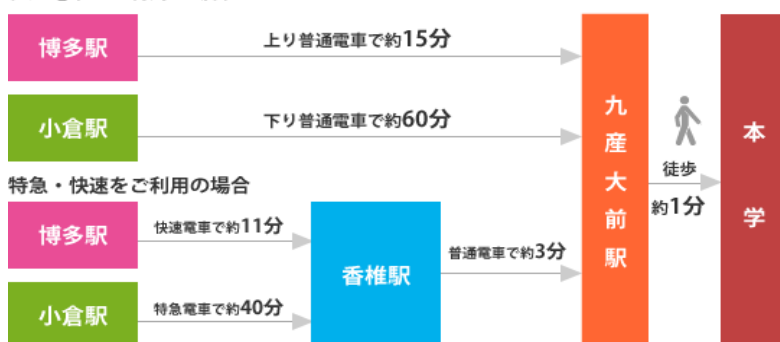
「九州産業大学南口」「九州産業大学前」バス停から、正門まで徒歩 5 分 ※正門から会場までは徒歩 3 分

・電車でお越しの方

JR 鹿児島本線「九産大前駅」から、北門まで徒歩 3 分 ※北門から会場までは徒歩 10 分

※詳細は、九州産業大学 Web ページ「アクセスマップ」をご覧ください。各所要時間については上記の情報を目安としてください。<https://www.kyusan-u.ac.jp/guide/summary/access.html>

普通電車をご利用の場合



I 大会案内

対面開催の主な会場は九州産業大学の「1号館2階」です。

【JR九産大前駅・同バス停からお越しの場合】

北門から2号館に向かい、2号館のエレベーターで5階にお越しください。1号館の2階に接続しています。

【九州産業大学南口・九州産業大学前バス停からお越しの場合】

正門周辺の工事のため、経路がわかりにくくなっています。正門から入構したら1号館の下まで直進してください。地下1階の建物入り口からお入りいただき、エレベーターか階段で2階にお越しください。



I 大会案内

13. 大会会場一覧

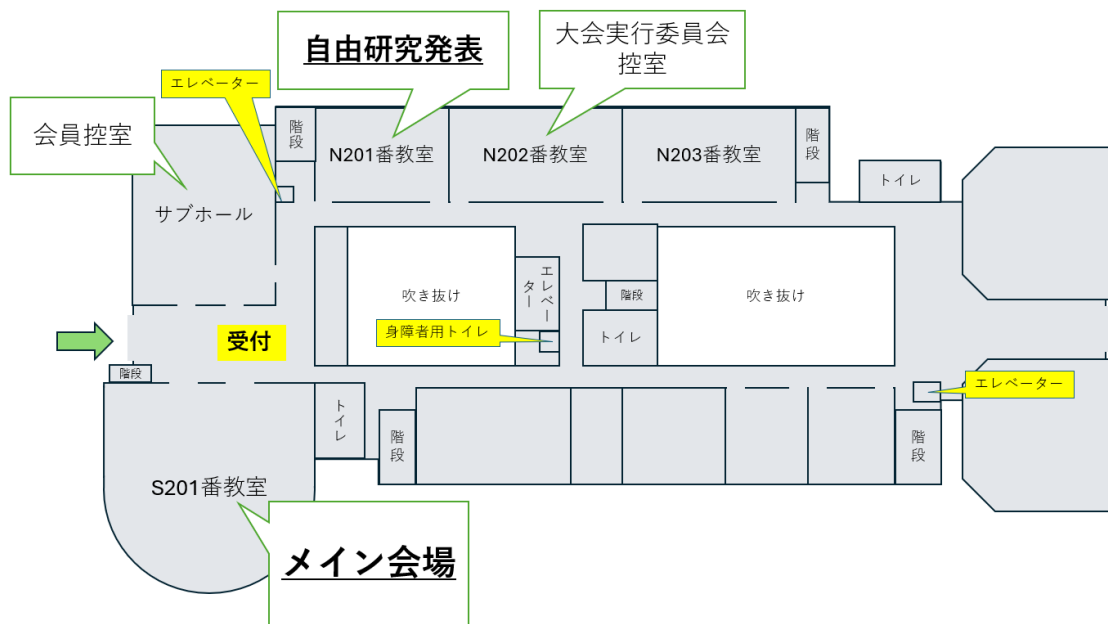
8月24日(月)と8月25日(火)に実施されるすべてのプログラム(大会受付・課題研究・シンポジウム・若手交流会・総会ほか)は九州産業大学1号館で開催します。

8月22日(土)	9:00-12:00 自由研究発表	オンラインのみ	
	13:00-15:30 自由研究発表		
	16:00-18:00 ラウンドテーブル		
	18:15-20:15 社員総会(理事会)		
8月24日(月) ハイフレックス	8:30- 受付	【エントランス】	大会実行委員会控室 【N202 番教室】 会員控室 【サブホール】
	9:00-12:00 課題研究 I	【S201 番教室】	
	9:00-12:00 自由研究発表(対面)①	【N201 番教室】	
	13:00-14:30 総会	【S201 番教室】	
	14:30-14:50 日本教育学会奨励賞 授賞式	【S201 番教室】	
	15:15-18:15 シンポジウム	【S201 番教室】	
8月25日(火) ハイフレックス	8:30- 受付	【エントランス】	
	9:00-12:00 課題研究 II	【S201 番教室】	
	9:00-12:00 自由研究発表(対面)②	【N201 番教室】	
	13:00-16:00 課題研究 III	【S201 番教室】	

プログラムは次ページに続きます。

I 大会案内

	13:00-16:00 自由研究発表(対面)③	【N201 番教室】	
	16:15-18:15 若手交流会	【S201 番教室】	



1号館 2階地図

II 大会日程

II 大会日程

8月22日(土)

自由研究発表 9:00~12:00 (部会により、終了時刻が早まります)

	テーマ	掲載頁
A-1	教育理論・思想・哲学①	20
A-2-1	教育史①	21
A-2-2	教育史②	22
A-5-1	比較・国際教育①	23
A-6-1	教育方法・教育課程①	24
A-6-2	教育方法・教育課程②	25
A-8	教科教育	26
A-11	幼児教育・保育①	27
A-12	初等・中等教育	28
A-14-1	教師教育①	29
A-15	社会教育・生涯学習	30
B-1-1	市民性教育の課題①	31
B-3	ジェンダーと教育	32
B-4	教員政策	33
B-5	教育学の問い直し	34
B-6	子ども問題と教育・福祉	35
B-9	地域コミュニティと教育	36
B-13	学校建築と教育	37

自由研究発表 13:00~15:30 (部会により、終了時刻が早まります)

	テーマ	掲載頁
A-1-2	教育理論・思想・哲学②	38
A-2-3	教育史③	39
A-3	学校制度・経営	40
A-4	教育行財政・教育法	41
A-5-2	比較・国際教育②	42
A-6-3	教育方法・教育課程③	43
A-11-2	幼児教育・保育②	44
A-13-1	高等教育・中等後教育①	45
A-13-2	高等教育・中等後教育②	46

II 大会日程

A-14-2	教師教育②	47
A-14-3	教師教育③	48
A-18	特別支援教育・特別ニーズ教育	49
B-1-2	市民性教育の課題②	50
B-2	学校のリアリティと教育改革の課題	51
B-7	危機と教育	52
B-11	教職員の多様なキャリア形成	53
B-12	学校をめぐる記憶の選別―「場」と「人」に焦点をあてて―	54

ラウンドテーブル 16:00～18:00

	テーマ	掲載頁
1	日韓における人口減少超少子社会への対応 ―政策動向を中心に―	55
2	学問分野の特性の実証的検討に向けて ―オーソリティによる定義と学生の習得内容の検討から―	56
3	歴史教育における政治的文脈 ―イタリアと日本との共通課題を探る―	57
4	子どもの権利(条約)とコルチャック ―その思想と歴史の考察―	58
5	アメリカにおける教師の専門性・専門職性とガバナンス ―制度的構造のもとでの模索と展開―	59
6	教育行政学の零度で ―視角・理論・存在事由の現代的再考―	60
7	教育について、家族と学校の関係から検討する	61
8	今改めてリテラシー・シティズンシップの概念を問う ―デジタル・ユネスコ・生涯学習の視点から―	62
9	続・教員への道 (2) ―「文検」「実検」「高検」の合格者の学びをめぐって―	63
10	オランダにおける日本教育受容の一動向 ―金森財団に着目して―	65
11	学会における倫理綱領の策定と運用をめぐる諸課題の検討	66
12	戦後初期の韓国における大学設立の諸相 ―大学と地域の連携構想とその受容―	67
13	学力の共通根と様態の多様性 ―国際的なフィールド調査と計量分析―	68

次ページに続きます。

II 大会日程

14	ポスト・ソビエト諸国における教育研究の decolonization と innovation —ペレストロイカ期からの教育改革と教育研究動向の再検討—	69
15	多様な学校と学校図書館 —特別支援学校と通信制高等学校における学校図書館の現状と可能性を考える —	70
16	子どもとともに対話をひらく —コモンワールズ・ペダゴジーの観点による乳幼児の探究プロセスの再解釈—	71

社員総会（理事会） 18：15～20：15

※ハイフレックス形式で開催される8月24日(月)・25日(火)の日程は、次ページ以降に掲載されています。

II 大会日程

8月24日(月)

課題研究Ⅰ 9:00~12:00

テーマ	掲載頁
AI時代における教育知の社会的生成と共有に向けて —「AIを育てる」条件と可能性を探る—	73

自由研究発表 9:00~12:00

	テーマ	掲載頁
C-1	対面発表部会①	75

[総会・日本教育学会奨励賞授賞式](#) 13:00~14:50

公開シンポジウム 15:15~18:15

テーマ	掲載頁
東アジアとグローバル教育ガバナンス	77

8月25日(火)

課題研究Ⅱ 9:00~12:00

テーマ	掲載頁
幼児教育における公正とは何か(仮) —教育における公正を出発点から問い直す— (What Does Equity Mean in Early Childhood Education?) -Rethinking Equity from the Foundation of Education-	80

自由研究発表 9:00~12:00

	テーマ	掲載頁
C-2	対面発表部会②	84

次ページに続きます。

II 大会日程

課題研究Ⅲ 13:00～16:00

テーマ	掲載頁
エビデンスの多元性に教育学の方法論はどう向き合うか —規範・定量・定性の補完性—	85

自由研究発表 13:00～16:00

	テーマ	掲載頁
C-3	対面発表部会③	87

若手交流会 16:15～18:15

テーマ	掲載頁
アーリーキャリア期の不安と期待	88

プログラム 第一日

8月22日（土）

（オンライン開催）

自由研究発表

ラウンドテーブル

社員総会（理事会）

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日（土） 9:00～12:00 （オンライン開催）

【一般 A-1 教育理論・思想・哲学①】

司会： 佐藤 隆之（早稲田大学）
渡邊 隆信（神戸大学）

- 9:00～9:30 共鳴するナラティブ、喚起されるイメージ
—グリーンのオーセンティシティ論について—
○桐田 敬介（武蔵野学院大学）
- 9:30～10:00 自由・公共性・アートをつなぐ教育哲学
—マキシム・グリーン『自由の弁証法』を読む—
○木村 浩則（文京学院大学）
- 10:00～10:30 N・ルーマンの「経歴」概念の再検討
—学習化状況における個人像の捉え直しのために—
○尾島 一気（明治大学大学院）
- 10:30～11:00 教育と「教育を受ける権利」のあいだ
—法＝権利システムと人格への時間の回帰をめぐって—
○佐藤 晋平（文教大学）
- 11:00～11:30 小中接続における道徳的雰囲気構築に向けた環境づくりの考察
—L.コールバーグ道徳教育論の「責任」としての道徳性の検討—
○作田 澄泰（九州女子大学）
- 11:30～12:00 討論

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 9:00~11:30 (オンライン開催)

【一般 A-2-1 教育史①】

司会： 富山 仁貴(明治大学)

- 9:00~9:30 宗像誠也旧蔵史料の構成とその歴史的価値
○菅原 然子(自由学園)
神代 健彦(京都教育大学)
桑嶋 晋平(日本女子大学)
濱沖 敢太郎(鹿児島大学学術研究院)
広田 照幸(日本大学)
- 9:30~10:00 上原専禄辞任に見る国民教育研究所の機構問題
○濱沖 敢太郎(鹿児島大学学術研究院)
- 10:00~10:30 日教組の運動方針案は誰が起草していたのか
—1960年代初頭までの検討—
○広田 照幸(日本大学)
- 10:30~11:00 梅根悟の障害児教育論における「子ども」の位置
—「大西問題を契機として障害者の教育権を実現する会」の
主張との異同に着目して—
○末岡 尚文(山梨学院短期大学)
- 11:00~11:30 討論

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日（土） 9：00～12：00 （オンライン開催）

【一般 A-2-2 教育史②】

司会： 川地 亜弥子（神戸大学）

- 9：00～9：30 漱石留学再考
—文部省外国留学生制度をめぐって—
○平田 諭治（筑波大学）
- 9：30～10：00 奈良女子高等師範学校における「博物家事部」の歴史的意義の
検討
○清重 めい（福井大学）
- 10：00～10：30 総力戦体制下における「国防競技」の受容
—地方の中等諸学校の視点から—
○市山 雅美
- 10：30～11：00 戦後岩手県における漁村カリキュラムの構想と実践
—岩手県教育研究所による生活綴方の批判的検討とその帰結
をめぐって—
○後藤 篤（宮城大学）
- 11：00～11：30 19世紀末イングランドにおける国教会系任意団体が求める
教師像
—手引書『見習い教師訓練法』の分析を中心に—
○中村 好甫（第一薬科大学）
- 11：30～12：00 討論

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日（土） 9：00～11：30 （オンライン開催）

【一般 A-5-1 比較・国際教育①】

司会： 服部 美奈（名古屋大学）

- | | |
|-------------|---|
| 9：00～9：30 | 日中における包括的セクシュアリティ教育（CSE）に関する検討
—歴史的・構造的要因の比較から—
○万 馨翼（東京大学大学院） |
| 9：30～10：00 | 韓国における AI 教材活用のための教師支援体制に関する研究
—AI デジタル教科書の制度転換後の普及過程に着目して—
○申 智媛（帝京大学短期大学） |
| 10：00～10：30 | Thailand Zero Dropout 政策による包括的な学習機会保障の展開
—タイ・スコータイ県を事例として—
○橋本 拓夢（大阪大学） |
| 10：30～11：00 | イングランドにおける「教師の多様性」研究の比較分析
—問題設定と研究アプローチに着目して—
○川口 広美（広島大学）
菊地 かおり(筑波大学) |
| 11：00～11：30 | 討論 |

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 9:00~12:00 (オンライン開催)

【一般 A-6-1 教育方法・教育課程①】

司会： 八田 幸恵 (大阪教育大学)

- 9:00~9:30 語の相互関係から立ち上がる表現の生成プロセス
—Thinking At the Edge に基づいた
小学校1年生の詩作実践を通して—
○海老澤 佳輝 (日本女子大学附属豊明小学校)
- 9:30~10:00 演劇教育実践の分析に向けたヴィゴツキアンアプローチの検討
○鈴木 雅大 (東京大学大学院)
- 10:00~10:30 英語教育における共存在の育成を目指す対話の構造
○藤居 真路 (広島文化学園大学)
- 10:30~11:00 子どもの発話における哲学的思考の萌芽に関する考察
—ガレス・マシューズの子どもの観とスーザン・アイザックス
幼児記録—
○長谷川 真也 (東京大学大学院)
- 11:00~11:30 日本の中等教育における「部分的英語による教科指導 (PEMI)」
の有効性
—Global Englishes の視点による言語習得と教科学習の統合
(ICL) モデルの構築—
○長村 裕 (福岡雙葉学園)
- 11:30~12:00 討論

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 9:00~12:00 (オンライン開催)

【一般 A-6-2 教育方法・教育課程②】

司会： 奥村 好美 (京都大学)

- 9:00~9:30 非認知力を育むウェルビーイングな学級経営法
—子どもが主体的に考え行動するシステム—
○梶谷 希美 (一般社団法人未来学園 HOPE)
- 9:30~10:00 「総合的な探究の時間」を中核に据えたカリキュラム・
マネジメントの分析枠組みの検討
—教育目標の具現化を支える対話型学校 IR の構築に向けて—
○川妻 篤史 (桐蔭横浜大学)
- 10:00~10:30 山形県醍醐小学校における「自然学習」
—林竹二の「授業」との関連—
○吉村 敏之 (宮城教育大学)
- 10:30~11:00 日本の教育研究における「アクション・リサーチ」の再検討
—「実践研究」との関係に着目して—
○橋本 拓海 (東京大学大学院)
宮島 衣瑛(広島大学大学院)
- 11:00~11:30 授業研究における教師の学びを再考する
—これまでの授業研究で見落とされてきたものと向き合う—
○石川 英志 (元・岐阜大学)
- 11:30~12:00 討論

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 9:00~12:00 (オンライン開催)

【一般 A-8 教科教育】

司会： 田上 哲 (九州大学)

- | | |
|-------------|--|
| 9:00~9:30 | 教員ディレクションを核とする AI 教育プラットフォームの設計
—国語科における教員-AI 協働の実践的探索—
○岩井 優士 (東京大学大学院) |
| 9:30~10:00 | 小学校社会科の政治学習における主権者像の再構築
—若狭蔵之助による「児童公園をつくらせたせっちゃんのおばさんたち」の実践をふまえて—
○大野木 俊文 (鹿児島大学) |
| 10:00~10:30 | 科学的探究における実験の位置づけ
○庄野 俊平 (東京大学大学院) |
| 10:30~11:00 | 実践理論に基づく音楽科授業研究
○小山 英恵 (東京学芸大学) |
| 11:00~11:30 | 道德性の諸様相についての考察 1
—仏教思想を手掛かりとして—
○安部 孝 (名古屋芸術大学) |
| 11:30~12:00 | 討論 |

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 9:00~12:00 (オンライン開催)

【一般 A-11-1 幼児教育・保育①】

司会： 内田 千春(東洋大学)

- | | |
|-------------|--|
| 9:00~10:00 | 公立保育園における探究活動の取り組み
—フィールドノートを通じた検討—
○影山 奈々美(東京大学大学院)
○丹伊田 真央(東京大学大学院)
○田中 茉莉子(東京大学大学院)
○原田 恵(東京大学大学院) |
| 10:00~10:30 | 保育内容(言葉)と児童文化財について
—日本の伝統色彩文化と絵本について—
○早川 礎子(日本グローバルビジネス専門学校) |
| 10:30~11:00 | 戦後教育史における自律的保育研究の系譜の検討
—斎藤公子による保育研究コミュニティを事例として—
○徳本 百合子(東京大学) |
| 11:00~11:30 | 徳永恕の託児所論における女性の余暇とフェミニズム
○稲井 智義(北海道教育大学) |
| 11:30~12:00 | 討論 |

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日（土） 9：00～12：00 （オンライン開催）

【一般 A-12 初等・中等教育】

司会： 中村 高康（東京大学）

- | | |
|-------------|---|
| 9：00～9：30 | 社会認識はどのように生成されるのか
—郷土概念の媒介機能に着目して—
○飯島 敏文（大阪教育大学） |
| 9：30～10：00 | 日本における「学校と学習塾の関係」の歴史的変遷
○鈴木 繁聡（大同大学） |
| 10：00～10：30 | 学校カリキュラムにおける「探究」概念の検討とその教育方法
学的意義
—「総合的な学習（探究）の時間」を中心に—
○田代 高章（岩手大学） |
| 10：30～11：00 | 中等教育へのPBL普及を妨げる構造的課題の検討
—日本特有のボトルネックへの挑戦の検証を通して—
○広石 英記（東京電機大学） |
| 11：00～11：30 | 高校生における重要な他者の変容
—友人から母親への重心移動とその定着—
○前馬 優策（広島経済大学） |
| 11：30～12：00 | 討論 |

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 9:00~11:30 (オンライン開催)

【一般 A-14-1 教師教育①】

司会： 金子 真理子 (東京学芸大学)

- | | |
|-------------|---|
| 9:00~9:30 | 自主的な研修に参加する教師たちの意味世界
—DAGによる分析の試み—
○長谷川 祐介 (大分大学) |
| 9:30~10:00 | 教師のライフヒストリー研究の検討
○神林 英里香 (東京大学大学院) |
| 10:00~10:30 | ある女性教員が離職した理由
—ジェンダー規範から制度運用の高校間格差分析へ—
○野村 駿 (秋田大学)
菊地原 守(鹿屋体育大学)
小田 郁予(都留文科大学) |
| 10:30~11:00 | 学校教育における physician-scientist の意義
○森 俊郎 (岐阜県公立中学校・愛知教育大学) |
| 11:00~11:30 | 討論 |

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日（土） 9：00～11：30 （オンライン開催）

【一般 A-15 社会教育・生涯学習】

司会： 田中 雅文（日本女子大学）

- 9：00～10：00 故人を偲ぶ会における「文学館的ミニ・ミュージアム」の可能性
—また会える、発見する、自分に出会う学びの場所へ—
○前田 稔（東京学芸大学）
○松山 明日香（東京学芸大学）
- 10：00～10：30 紛争解決のためのシティズンシップ教育
—少年鑑別所における交渉を事例に—
○小貫 篤（埼玉大学）
- 10：30～11：00 近年の韓国における「保護者教育」政策の特質
—「保護者力量」と「成長する保護者」像に着目して—
○大日方 真史（三重大学）
申 智媛（帝京大学短期大学）
- 11：00～11：30 討論

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 9:00~11:30 (オンライン開催)

【一般 B-1-1 市民性教育の課題①】

司会： 北山 夕華 (大阪大学)

- | | |
|-------------|---|
| 9:00~9:30 | スウェーデンの民主主義教育から日本の主権者教育を捉え直す
—教化 (indoctrination) 概念を手がかりに—
○宇恵野 珠美 (白梅学園大学) |
| 9:30~10:30 | 省察的コンセンサス・モデレーションによる「学習としての評価」の公共性の構築
○遠藤 貴広 (福井大学)
○増田 美奈(富山大学)
本所 恵 (金沢大学) |
| 10:30~11:00 | 日本における「困難な歴史」を教えるための教師支援ワークショップの可能性
—参加者の学びの分析を通じて—
○原口 友輝 (中京大学)
空 健太(岐阜大学) |
| 11:00~11:30 | 討論 |

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日（土） 9：00～11：00 （オンライン開催）

【一般 B-3 ジェンダーと教育】

司会： 多賀 太（関西大学）

- 9：00～9：30 保育現場におけるジェンダー・ステレオタイプに関する意識と経験
—愛媛県内の保育者を対象とした実態調査から—
○山口 真美（松山大学）
影浦 紀子（松山東雲女子大学）
- 9：30～10：00 インプロはジェンダー・セーフ・スペースを構築できるか
—現職教員対象実践におけるファシリテーターの「恐れ」の分析—
○園部 友里恵（三重大学）
- 10：00～10：30 チェコの分岐型学校制度とジェンダー
—後期中等教育における進路選択の固定化メカニズム—
○石倉 瑞恵（石川県立大学）
- 11：30～11：00 討論

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日（土） 9：00～11：30 （オンライン開催）

【一般 B-4 教員政策】

司会： 佐久間 亜紀（慶應義塾大学）

- | | |
|-------------|--|
| 9：00～9：30 | 自治体は在外教育施設への教員派遣にどう対応しているか
—都道府県・政令指定都市データを用いた比較分析—
○芝野 淳一（中京大学） |
| 9：30～10：00 | 教員採用試験の合否におけるジェンダー不平等の潜在可能性
—統計的因果推論による効果修飾の視座から—
○松宮 慎治（城西大学） |
| 10：00～10：30 | カナダ・サスカチュワン州における教員の勤務条件に関する一
考察
○平田 淳（佐賀大学） |
| 10：30～11：00 | アメリカにおける代理教員制度の構造的特質
—サンフランシスコ学区を中心に—
○佐藤 仁（福岡大学）
原北 祥悟（崇城大学） |
| 11：00～11：30 | 討論 |

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日（土） 9：00～12：00 （オンライン開催）

【一般 B-5 教育学の問い直し】

司会： 西村 拓生（立命館大学）

- | | |
|-------------|--|
| 9：00～9：30 | サラ・アーメッドを用いた和辻哲郎「風土論」再解釈の試みとその教育学的意義（仮題）
○野口 俊亮（東京大学大学院） |
| 9：30～10：00 | 教育学研究における「民族」概念の検討
— 国民教育運動から先住民族教育までの思想的変遷 —
○久野 亜希子（東京都立大学大学院） |
| 10：00～10：30 | 戦後日本における教育制度のなかの「天皇制」
— 持田栄一の議論から —
○齋藤 崇徳（社会構想大学院大学） |
| 10：30～11：00 | 村田栄一の1970年代
— 〈社会問題の教育化〉の視点から —
○倉石 一郎（京都大学大学院） |
| 11：00～11：30 | ポストヒューマニズムと教育の未来
— 基本概念と教育学への示唆 —
○坂本 旬（法政大学） |
| 11：30～12：00 | 討論 |

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日（土） 9：00～12：00 （オンライン開催）

【一般 B-6 子ども問題と教育・福祉】

司会： 澤田 稔（上智大学）

- 9：00～9：30 保育ソーシャルワークの専門性定義の現状
○吉田 直哉（大阪公立大学）
- 9：30～10：00 対話を基盤とした形成的評価が主体性に及ぼす効果
—発達障害児における自己目標・自己評価を中心とした参加型
エンパワメント実践—
○龍場 三千代（広島大学ダイバーシティ&インクルージョン
推進機構）
- 10：00～10：30 合理的配慮の捉え方への再考
—「提供する／提供される」ものから「見出す／見出される」
合理的配慮へ—
○金 仙玉（富山国際大学）
- 10：30～11：00 学校問題への対応による居場所の再編
○佐藤 晃子（川口短期大学）
- 11：00～11：30 学習支援の場における居場所とケアに関する一考察
—大学生ボランティアの語りに着目して—
○松村 智史（名古屋市立大学）
- 11：30～12：00 討論

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 9:00~12:00 (オンライン開催)

【一般 B-9 地域コミュニティと教育】

司会： 木戸口 正宏 (北海道教育大学)

- 9:00~9:30 高校生と地域の人たちと共時的関係の築き方
—一人が共感に目覚める時—
○畑井 克彦 ((一社) 集団力学研究所)
- 9:30~10:00 専門職養成に係る医療的ケア教育に関する実践および省察
○山本 智子 (国立音楽大学)
- 10:00~10:30 AIによる指導者の知識構造化と指導の支援
—社交ダンスの指導現場から—
○西村 拓一 (北陸先端科学技術大学院大学)
- 10:30~11:00 コミュニティ・スクール参加が教員の職務経験に与える影響の探索的研究
—JD-Rモデルの視点から—
○早坂 淳 (長野大学)
- 11:00~11:30 学校統廃合をめぐる合意形成と地方自治
—対立顕在化地域における住民インタビューから—
○丹間 康仁 (筑波大学)
- 11:30~12:00 討論

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 9:00~12:00 (オンライン開催)

【一般 B-13 学校建築と教育】

司会： 四方 利明 (立命館大学)

- 9:00~9:30 オープン・スクールの建築と教育
—愛知県・東浦町立緒川小学校に着目して—
○内山 朋香 (東京大学大学院)
- 9:30~10:00 公立学校の教室不足問題に対する政府間財政関係
○浜 えりか (愛知学泉大学)
- 10:00~10:30 学校施設と公共施設マネジメント
—プロセス・デザインの視点からの考察—
○荻野 亮吾 (日本女子大学)
- 10:30~11:00 使い手の意思を反映した学校施設建設の可能性
○笠井 尚 (名城大学)
- 11:00~11:30 学校における空間の構成と子どもの行為との相互規定関係をと
らえる視点の検討
○藤江 康彦 (東京大学大学院)
- 11:30~12:00 討論

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日（土） 13:00～15:30 （オンライン開催）

【一般 A-1-2 教育理論・思想・哲学②】

司会： 岡部 美香（大阪大学）

- 13:00～13:30 「無知な教師」における意志の強制性
—ランシエールの注意概念に着目して—
○赤嶺 洋道（東京大学大学院）
- 13:30～14:00 エトムント・フッサールの仏教テキスト
—超越論的倫理の萌芽—
○田端 健人（宮城教育大学）
- 14:00～14:30 教育人間学における「超越」概念をめぐる諸問題の検討
—西平直における「自己超越」概念に焦点を当てて—
○須郷 歩（東京大学）
- 14:30～15:00 教養は差別の道具
—1960年代東京大学教養学部の人文学者らによる女子学生亡国論—
○松井 健人（東洋大学）
- 15:00～15:30 討論

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 13:00~15:30 (オンライン開催)

【一般 A-2-3 教育史③】

司会： 小玉 亮子 (大阪信愛学院大学)

- | | |
|-------------|---|
| 13:00~13:30 | 戦前の長野県における貧困児童に対する就学奨励の実態
○小長井 晶子 (東京都立大学) |
| 13:30~14:00 | 市区町村学力テストの戦後史
—実施経緯と実施主体を中心に—
○北野 秋男 (日本大学) |
| 14:00~14:30 | 1930年代米国ヴァージニア州の初等学校の授業実践の変容
—改訂版コースオブスタディの影響に注目して—
○斉藤 仁一朗 (横浜国立大学) |
| 14:30~15:00 | 20世紀転換期ロンドン学校医療サービスの医療費負担制度の
歴史的展開
—定額制料金制度の導入に着目して—
○増田 圭佑 (日本大学) |
| 15:00~15:30 | 討論 |

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 13:00~15:30 (オンライン開催)

【一般 A-3 学校制度・経営】

司会： 柏木 智子 (立命館大学)
辻野 けんま (大阪公立大学)

- 13:00~13:30 留学生数が高等教育機関の経営や地域に与える影響
—カナダ BC 州の事例から—
○熊谷 朋子 (北陸大学)
- 13:30~14:00 戦後日本における二交代定時制高校の成立と展開
—「全国学校一覧」にみる設置・廃止の動向—
○内田 康弘 (愛知学院大学)
- 14:00~14:30 高等支援学校と越境学習の制度的生成と主体化の条件
—時間統治・翻訳実践・逆の包摂の統合モデル—
○中島 弘和 (元国立都城工業高等専門学校)
- 14:30~15:00 「専門家学習共同体」を創造するためのリーダーシップに関する考察
—Linda Lambert の「構成主義的リーダーシップ」論に着目して—
○織田 泰幸 (三重大学)
- 15:00~15:30 討論

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 13:00~15:00 (オンライン開催)

【一般 A-4 教育行財政・教育法】

司会： 谷口 聡 (中央学院大学)

- | | |
|-------------|--|
| 13:00~13:30 | 1958年学習指導要領「道徳の時間」成立過程における宗教系学校の対応
○李 愛慶 (明治学院大学) |
| 13:30~14:00 | 教員採用・人事行政の戦後史
—空間的単位の再編に着目して—
○前田 麦穂 (國學院大學) |
| 14:00~14:30 | 公費による塾代助成事業の実態と課題
○佐久間 邦友 (日本大学) |
| 14:30~15:00 | 討論 |

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 13:00~15:30 (オンライン開催)

【一般 A-5-2 比較・国際教育②】

司会： 徳永 智子 (筑波大学)

- 13:00~13:30 教育借用理論からみた日本におけるフォルケホイスコーレの実践
—1990年~2000年代に焦点をあてて—
○佐藤 裕紀 (新潟医療福祉大学)
- 13:30~14:00 ポルトガルの学校教育におけるブラジル人生徒
—同じポルトガル語圏で生じる教育的課題—
○二井 紀美子 (愛知教育大学)
- 14:00~14:30 アメリカの社会的分断と民主主義の危機が教育に与える影響
—初等中等教育レベルの近年の状況に着目して—
○吉良 直 (東洋大学)
- 14:30~15:00 Educational Instructions from Chinese Authorities in the last 20
Years
—From the Aspect of Ensurance for Livelihood Protection—
○呉 凡 (広島大学)
- 15:00~15:30 討論

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 13:00~15:30 (オンライン開催)

【一般 A-6-3 教育方法・教育課程③】

司会： 石井 英真 (京都大学)

- 13:00~13:30 1960年代における「科学と教育の結合」言説の歴史的文脈
○佐藤 英二 (明治大学)
- 13:30~14:00 社会科実践家・安井俊夫による「楽しくわかる授業」論
—安井俊夫のライフヒストリーに基づいて—
○小沼 聡恵 (東京大学大学院)
- 14:00~14:30 新逆向き設計による歴史学習の設計と教育学概論における試行的取
り組み
○松田 稔樹 (江戸川大学)
- 14:30~15:00 科学教育における「科学的探究」と「科学的実践」はいかなる関係
にあるのか
—J. J. シュワブの「探究」を手がかりに—
○磯部 和宏 (東京科学大学)
- 15:00~15:30 討論

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 13:00~15:00 (オンライン開催)

【一般 A-11-2 幼児教育・保育②】

司会： 志村 聡子 (立正大学)

柳井 郁子 (洗足こども短期大学)

- | | |
|-------------|--|
| 13:00~13:30 | 短期大学通信教育における人材育成方針と教育観
—専門学校との併修制度と保育者養成に着目して—
○山鹿 貴史 (学校法人三幸学園 小田原短期大学)
古塚 典洋 (星槎大学)
小暮 克哉 (信州大学) |
| 13:30~14:00 | 森のようちえん実践の制度化過程
—全国ネットワーク連盟に着目して—
○渡邊 綾 (信州大学) |
| 14:00~14:30 | 子ども・子育て新システム検討過程における子育て支援言説
—検討会議議事録分析を中心に—
○久保田 健一郎 (大阪国際大学短期大学部) |
| 14:30~15:00 | 討論 |

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 13:00~15:30 (オンライン開催)

【一般 A-13-1 高等教育・中等後教育①】

司会： 吉川 裕美子 (大学改革支援・学位授与機構)

- | | |
|-------------|--|
| 13:00~13:30 | スウェーデンの大学における学生代表養成制度に関する考察
—大学と学生組合との関係性に着目して—
○武 寛子 (愛知東邦大学) |
| 13:30~14:00 | 英国大学におけるエビデンスに基づく平等・多様性・包摂の組織的推進
—北西部リバプール地域を中心に—
○鳥居 朋子 (早稲田大学) |
| 14:00~14:30 | 米国アクレディテーション基準における DEI 規定の形成と変容
—北中部協会の基準に着目して—
○吉田 翔太郎 (山梨大学) |
| 14:30~15:00 | 教育達成過程における都道府県外からの地域移動の趨勢
○村山 詩帆 (佐賀大学) |
| 15:00~15:30 | 討論 |

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 13:00~15:00 (オンライン開催)

【一般 A-13-2 高等教育・中等後教育②】

司会： 片山 悠樹 (愛知教育大学)

- | | |
|-------------|--|
| 13:00~13:30 | 若者の自己肯定認識に影響を及ぼす要因は何か？
—大学生における「読書活動経験」に関する実態調査からの考察—
○腰越 滋 (東京学芸大学) |
| 13:30~14:00 | 社会人大学院生の入学時アカデミック・スキルにおける課題
○齋藤 早苗 (お茶の水女子大学大学院) |
| 14:00~14:30 | 奨学金負債が社会的地位達成に与える影響の検証
—ウェブモニタ調査に基づく分析—
○王 傑(杰) (慶応義塾大学) |
| 14:30~15:00 | 討論 |

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 13:00~15:30 (オンライン開催)

【一般 A-14-2 教師教育②】

司会： 岩田 康之 (東京学芸大学)

- | | |
|-------------|---|
| 13:00~13:30 | カリキュラム・マネジメントの理論的検討と教職科目「教育実習」での実践的応用
○大辻 永 (東洋大学) |
| 13:30~14:00 | 実習生指導を担う学校現場の教師教育者の専門的力量とその発達
—日本とイギリスの教師たちへの調査からの報告—
○田中 里佳 (三重大学) |
| 14:00~14:30 | 教師教育政策と教育学研究に関する日英比較
○山崎 智子 (北海道教育大学) |
| 14:30~15:00 | 教師の職場環境を測定する尺度の開発
—日本語教師を対象とした質問紙調査—
○成 利楽 (立命館アジア太平洋大学) |
| 15:00~15:30 | 討論 |

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 13:00~15:30 (オンライン開催)

【一般 A-14-3 教師教育③】

司会： 浜田 博文 (筑波大学)

- | | |
|-------------|--|
| 13:00~13:30 | 生成 AI パイロット校における学校研究の発展過程と発展方略
—専門的な学習共同体 (PLC) 形成の観点から—
○後藤 壮史 (大阪大谷大学) |
| 13:30~14:00 | 教育の改善・改革を目指す環境づくり
○後藤 郁子 (お茶の水女子大学) |
| 14:00~15:00 | 現代米国における「登録教員アプレンティス制度 (Registered Teacher Apprenticeship Program: R-TAP)」の展開と特質
○榎 景子 (長崎大学)
○永岡 珠瑠 (神戸大学)
○綾 香音 (神戸大学)
○井上 純那 (神戸大学)
○山下 晃一 (神戸大学大学院) |
| 15:00~15:30 | 討論 |

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日（土） 13：00～15：00 （オンライン開催）

【一般 A-18 特別支援教育・特別ニーズ教育】

司会： 木村 祐子（東京成徳大学）

- 13：00～13：30 インクルーシブ教育を実現する児童生徒理解・支援シートの検討
—地方自治体による様式の比較を通して—
○村瀬 公胤（一般社団法人麻布教育ラボ）
岸本 琴恵（国立法人琉球大学）
- 13：30～14：00 1960年代の特別な教育的ニーズ概念について
○河合 悠里（明治大学大学院）
- 14：00～14：30 米国における知的障害者のインクルーシブな大学教育政策
—その発展と権利擁護団体の果たした役割—
○水野 和代（日本福祉大学）
- 14：30～15：00 討論

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 13:00~15:30 (オンライン開催)

【一般 B-1-2 市民性教育の課題②】

司会： 片山 勝茂 (東京大学)

- | | |
|-------------|--|
| 13:00~13:30 | アンサンブル・ディバイジング演劇を通じたシティズンシップ教育の再検討
—アイルランドとイギリスの比較を通して—
○氏井 紅葉 (上智大学) |
| 13:30~14:00 | 民主主義の危機と若者の政治参加
—ヨーロッパのシティズンシップ教育と社会運動に着目して—
○秦 範子 (都留文科大学) |
| 14:00~15:00 | アメリカ市民性教育における研究—実践を繋ぐ組織の役割と意義
—intermediary organizations (媒介的組織) 論を分析視角として—
○古田 雄一 (筑波大学)
○松原 信喜 (広島大学大学院)
川口 広美 (広島大学) |
| 15:00~15:30 | 討論 |

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 13:00~15:00 (オンライン開催)

【一般 B-2 学校のリアリティと教育改革の課題】

司会： 黒田 友紀 (日本大学)

- 13:00~13:30 チャレンジスクールにおいて生徒の「主体性」はどのように捉えられているか
—教師の〈語り〉と実践に着目して—
○藤掛 みゆき (東京大学大学院)
- 13:30~14:00 拡張的学習に基づいた「拡張する学校」づくりに関する研究
—ネットワークの視点から捉える成城学園初等学校の越境的融合—
○白敷 哲久 (昭和女子大学)
- 14:00~14:30 定時制高校における社会的包摂の実態
—長野県U高校の事例から—
○岡部 敦 (清泉大学)
武田 るい子 (清泉大学)
西村 貴之 (駿河台大学)
- 14:30~15:00 討論

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 13:00~15:00 (オンライン開催)

【一般 B-7 危機と教育】

司会： 阿内 春生 (早稲田大学)

- | | |
|-------------|--|
| 13:00~13:30 | 災害後の広域避難発生時における教員の県外派遣施策に関する検討
—INEEのミニマムスタンダードの視点から—
○中丸 和 (東日本大震災・原子力災害伝承館) |
| 13:30~14:30 | R6 能登半島地震における「学校再開」プロセスの分析
—輪島市の事例から—
○土屋 明広 (金沢大学)
○佐藤 修司 (秋田大学)
○谷 雅泰 (福島大学) |
| 14:30~15:00 | 討論 |

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 13:00~14:30 (オンライン開催)

【一般 B-11 教職員の多様なキャリア形成】

司会： 紅林 伸幸 (常葉大学)

伊勢本 大 (松山大学)

13:00~13:30

教員による転職判断の境界線に関する一考察

—「自発的離職」に関する聴き取りを中心に—

○坂本 建一郎 (時事通信社)

元木 廉 (越谷保育専門学校)

伊井 義人 (大阪公立大学)

13:30~14:00

教員の離転職・副業意識の変動

—就業構造基本調査のオーダーメイド集計から—

○加藤 一晃 (名古屋芸術大学)

磯和 壮太郎 (名古屋芸術大学)

西田 拓郎 (東海学院大学)

14:00~14:30

討論

Ⅲ プログラム

一般研究発表【A】 8月22日(土) 13:00~15:30 (オンライン開催)

【一般 B-12 学校をめぐる記憶の選別—「場」と「人」に焦点をあてて—】

司会： 田嶋 一 (國學院大學・名誉教授)

- | | |
|-------------|--|
| 13:00~13:30 | 山村の木造校舎をめぐる記憶
○多和田 真理子 (國學院大学) |
| 13:30~14:00 | 学校の記憶を編む
—記念誌類に描かれた廃校小学校の歴史—
○小林 正泰 (共立女子大学) |
| 14:00~14:30 | 学校教育における儀式唱歌の指導
—昭和初期を中心に—
○藤井 康之 (奈良女子大学) |
| 14:30~15:00 | 共に歌う身体の記憶
—儀式唱歌の聞き取りを通して—
○有本 真紀 (立教大学) |
| 15:00~15:30 | 討論 |

III プログラム

ラウンドテーブル 8月22日(土) 16:00~18:00

【1】 日韓における人口減少超少子社会への対応

—政策動向を中心に—

企画者／報告者： 渡部 昭男（大阪信愛学院しんあい教育研究ケアセンター 基調提案）

報告者： 金 鉉哲（韓国青少年政策研究院前院長／Future Values & Education 代表 話題提供：韓国における超少子社会政策の動向）

指定討論者： 斐 智恵（桜美林大学准教授 コメント1：家族社会学の立場から）

企画者／指定討論者： 渡部(君和田) 容子（京都芸術大学非常勤 コメント2：保育幼児教育の立場から）

《趣 旨》

人口置換水準の出生率は2.08前後であり、1.5未満を超少子化と言う。日本の合計特殊出生率は2023年1.20、24年1.15にまでに落ち込み、2050年台には人口1億人割れが予測される。韓国は2023年0.72、24年0.75（速報：25年0.80）であり、底を打ち微増傾向にあるものの日本以上に超低少子化の状況にある。大学等進学志向の強い日韓では共に、高等教育を含む子育て教育の私費負担の重さがその一因とされている。

日本では、「異次元の少子化対策」の掛け声のもと、2030年までが少子化トレンド反転のラストチャンスであると捉えて、こども未来戦略を閣議決定し（2023.12）、その前半3カ年を集中取組み期間と定めて加速化プラン（2024-26）を展開中である。韓国では、李在明（イ・ジェミョン）政権が国政運営5カ年計画（2025-29）において、23大推進課題及び123大政課題に「人口危機を克服する大転換」を位置づけている。そして、「青年教育福祉の生活支援・生活保障」並びに「地方主導成長政策」の視点も加味した取組みに踏み出している。一方で、「第5次少子化・高齢社会基本計画（2026-30）」の策定公表は相当に遅れている。

ところで、2023年施行こども基本法は「こども」を「心身の発達の過程にある者をいう」（2条1項）と定義し、一律に18歳等の年齢で区切っていない。このことによって、妊娠・出産から青年・成人期に至るまでの「心身の発達の過程を通じて切れ目なく行われるこどもの健やかな成長に対する支援」（同2項一）という視点で捉え直し、シームレスでトータルな／切れ目ない一体的・総合的な「こども施策」を吟味し、議論し、探究する学術的課題が生まれている。

本企画では、日韓における人口減少超少子社会への対応については政策動向を中心に情報交換し、教育学が引き取り深めるべき課題を探る。

Ⅲ プログラム

ラウンドテーブル 8月22日(土) 16:00~18:00

【2】 学問分野の特性の実証的検討に向けて

—オーソリティによる定義と学生の習得内容の検討から—

企画者／報告者： 深堀 聡子（九州大学）
 松下 佳代（京都芸術大学）
 香川 めい（大東文化大学）
 本田 由紀（東京大学）

《趣 旨》

学問分野を「文系」「理系」に区分する思考法が日本では広く共有されてきたが、現在では文理融合やSTEAM教育の必要性が政策的に謳われるようになってきている。一方、文理以外の区分で学問分野の特性を把握する試みもある。例えば渡辺・齋藤（2020）は、「実学」と「リベラルアーツ」に分類した分析を行っている。また、『東京大学人文社会科学振興ワーキング・グループ最終報告書』（2020）では、区分法の例として①「アカデミック・キャピタリズム」との距離の遠近による区分、②現実の探究（「現実のモデル」の探究）を目標とするのか、価値や規範の探究（「現実へのモデル」の探究）を目標とするのかによる区分、③説明（機能連関の把握）を方法とするのか、解釈（意味連関の把握）を方法とするのかによる区分、④「仮説」を「検証」すること（実証的論理作法）を手法とするのか、「仮説」を「発想」すること（推論作法としてのアブダクション）を手法とするのかによる区分の4つが挙げられている。

多様な学問分野の特性を把握する上で、いかなる区分軸を用いることが実態に即しているのかについては、より実証的な検討が必要とされるが、そのような試みはまだ緒に就いたばかりと言える。さらに、オーソリティにより定義された各学問分野の特性と、大学等の教育機関において学生により実際に習得された内容との間には齟齬があるおそれもある。「教育の質保証」が政策課題とされている中で、高等教育の基盤となる学問分野の特性を把握検討する必要性は大きい。

本ラウンドテーブルでは、日本学術会議「大学教育の分野別質保証推進委員会」（オーソリティ）により作成された各学問分野の「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準」のテキストと、それをもとに質問項目を作成し学生を対象に実施した調査のデータを素材として、様々な学問分野の特性について検討することを試みる。

III プログラム

ラウンドテーブル 8月22日(土) 16:00~18:00

【3】 歴史教育における政治的文脈 —イタリアと日本との共通課題を探る—

企画者／報告者： 徳永 俊太（京都教育大学）

指定討論者： 近藤 孝弘（早稲田大学）

報告者： Cajani Luigi（Sapienza University of Rome (formerly)）

司会者： 玉井 慎也（北海道教育大学）

《趣 旨》

それぞれの国における政治的文脈は、その国の歴史教育に影響を及ぼす。時に政治は歴史教育を利用し、その学問的意義を取り除こうともする。日本では、歴史教育が全体主義体制に利用された反省から、歴史教育の政治的な利用に対して、常に批判的なまなざしを向けてきた。ファシズム体制を経験したイタリアでも、同様である。

しかし、歴史教育を政治的に利用しようとする試みは止むことがない。本ラウンドテーブルの目的は、イタリアと日本の歴史教育における政治的な文脈を読み解くことで、歴史教育の政治的な利用における共通課題を探ることである。元ローマ・ラ・サピエンツァ大学のカイアーニ教授には、近年の大きな議論を巻き起こしたイタリアの公教育における歴史科の改訂について、その政治的文脈を踏まえて発表いただく（英語発表、同時通訳）。イタリアの文脈を受けて、企画者の徳永から日本において、歴史教育にどのような政治的背景が存在してきたのかを発表する。両者の発表と近藤孝弘教授から指定討論を踏まえて、参加者全員で議論を深めていきたい。

III プログラム

ラウンドテーブル 8月22日(土) 16:00~18:00

【4】 子どもの権利(条約)とコルチャック

—その思想と歴史の考察—

司会者： 石川 道夫(元藤田医科大学)

企画者/報告者： 塚本 智宏(名寄市立大学)

企画者/報告者： 小田倉 泉(埼玉大学)

《趣 旨》

わが国で1989年の前後から、「子どもの権利条約の精神的父」と呼ばれている(呼んでいる)ヤヌシュ・コルチャックの子どもの権利思想について、わが国ではようやく、コルチャックテキスト『子どもをいかに愛するか』(全4編、初版1918~1920年、改訂版1929年)をもとにクリティカルに研究する段階にたどり着いた(本テキストは2024年度のラウンドテーブルでとりあげた)。本ラウンドテーブルでは、子どもの「権利」の主体性の認識について道を開いたコルチャックの思想に二つの次元の異なる考察を試みる。

ひとつがテキストに基づく思想的なアプローチである。1.乳幼児にとって“権利主体性”とは何か—主としてコルチャックが先のテキストの中で試みた乳幼児観察と「子どもの中の人間」探究についての考察である。これは最近のこども家庭庁の政策大綱や国連の事務総長のノートに現れている子どもの権利主体の認識とも関わる研究の課題である。

もうひとつが、制度史的アプローチである。2.1979年から1989年子どもの権利条約制定(“新しい子ども観”)を経てさらにその普及に際して関わったポーランド(A・ウォパトカ)の関与の変遷とそこでのコルチャックの位置に関する研究である。ここでは2007年の国連の公文書にある条約とポーランド・コルチャックの間にある直接的連続的な関係の過大評価の批判を試みる。

石川道夫(元藤田医科大学)の司会で、前記1.2を順に、小田倉泉(埼玉大学)と塚本智宏(名寄市立大学)とが考察と報告を行い、これに基づき、参加者が自由に意見交換を行い研究の現状と課題を明らかにする。

III プログラム

ラウンドテーブル 8月22日(土) 16:00~18:00

【5】 アメリカにおける教師の専門性・専門職性とガバナンス —制度的構造のもとでの模索と展開—

企画者／報告者： 間篠 剛留（日本大学）

報告者： 長嶺 宏作（埼玉大学）

佐藤 仁（福岡大学）

指定討論者： 高野 貴大（茨城大学）

司会者： 森本 和寿（大阪教育大学）

芦沢 柚香（常磐大学）

《趣 旨》

近年、アメリカにおける教職は、教育改革の進展や社会状況の変化のなかで、その専門性（実践における知や能力）・専門職性（制度的地位や社会的承認）のあり方が改めて問われている。とりわけ、アカウントビリティ政策や標準化の進展により、教員の専門的判断と制度的統制との関係が再編されつつあり、教職をめぐる議論は新たな局面を迎えている。このような状況は、専門職としての地位や質の向上を目指す取り組みが、結果として外部的な評価や管理の枠組みと結びついてきた歴史的経緯とも関わっている。

本ラウンドテーブルでは、この問題をガバナンスの観点から検討する。アメリカの教育は、連邦・州・学区という多層的な統治構造と、地域社会の関与の強さを特徴としており、教職の専門職性もまた、この制度的条件のもとで形成されてきた。こうした構造は、中央集権的な制度とは異なる形で、統制と自律の関係を複雑に規定している。また、何を専門性と捉え、それをどのように保障し発展させていくかという議論にも、この構造は密接に関わっている。

本企画では、進歩主義期における教師による教育研究の試み、現代における教員養成や質保証をめぐる制度的枠組み、さらに分権化のもとで進展する地域主導の教育改革の動向を取り上げ、各時代において教職がいかなる制約のもとで専門職性のあり方を模索してきたのかを検討し、その蓄積を踏まえて現代的課題に応答するための視座を導き出したい。そのうえで、近年の議論に見られる協働的・関係的な専門性の捉え方にも目を向け、教職の専門性・専門職性を支える新たな視点について検討する。本企画を通じて、現代の教育を取り巻く状況のもとで、教職の専門職性をどのように位置づけ直すことができるのか、その課題と可能性を考察したい。

III プログラム

ラウンドテーブル 8月22日(土) 16:00~18:00

【6】 教育行政学の零度で

— 視角・理論・存在事由の現代的再考 —

企画者／報告者： 佐藤 晋平（文教大学）

桐村 豪文（大阪教育大学）

山下 晃一（神戸大学）

企画者／指定討論者： 荻原 克男（北海学園大学）

《趣 旨》

昨今の教育行政学、または政策・制度等の研究群は、個々の研究関心がバラバラに点在し、相互に接点を欠いているように見える。しかし、これら相互の関係を考えたり、統合する理論を考えたりしようとする動きは、ほとんどない。そして、なぜこのようにバラバラになってしまったのかについて、省察される機会も少ない。政策科学的な研究群は方法上の厳密性を追求する共通点を有するが、それが（あるいはその特徴によって）教育はどうあるべきかというこの研究共同体の存在事由そのものへの言及につながらない。このままでもよいと言う人々もいるかもしれないが、教育の制度面に言及して良くも悪くも権力の働きを後押しする研究群が、その存在論的基盤に関する反省的思考の凝集点を維持する努力をしないことの問題は、小さくはない。

過去にも、規範的な議論の再興の重要性などはたびたび指摘された。しかし上のような状況までくると、ただ規範的にものを言えばよいわけでもない。教育行政・政策・制度等の研究がかかわる諸事象が置かれた現代的状況を正確にとらえる努力を欠けば、規範はただの荒唐無稽な幻想に終わる。ポストヒューマン論が台頭し〈人間〉を形成しようとした近代教育が過去のこととなり、公立学校はケア・福祉の場、もしくはただの収容所へ変容しつつある一方で、私事化・市場化・自己責任化はほぼ定着して民主主義は困難となってきた。目下展開する教育と呼べるか不明瞭なものについて、私たちはいったいなにを管理・助成しあるいは批判すべきなのか。現代社会の状況を的確にとらえる理論的努力の上に、規範が鍛えられなければならない。

本ラウンドテーブルでは、上記の問題関心からいくつかの論点について報告する。だがより重要な目的は、フロアとの議論で上記の課題にともに迫る機会を作ることだと考えている。

Ⅲ プログラム

ラウンドテーブル 8月22日(土) 16:00~18:00

【7】 教育について、家族と学校の関係から検討する

企画者： 小玉 亮子（大阪信愛学院大学）

報告者： 堀内 かおる（横浜国立大学）

加藤 美帆（東京外国語大学）

額賀 美紗子（東京大学）

西村 純子（お茶の水女子大学）

《趣 旨》

子どもに関する問題が語られる時、家族は何をしていたのか、学校はどう対応したのか、といった問いがこれまで繰り返されてきた。確かに、問題の背景を問い、その解決を模索することは重要なことである。しかし、こういった議論の中で、学校と家族の対立が引き起こされ、家族が追い詰められ、学校現場の困難が加速されてきた流れがあったことは否めない。もちろん、こういった議論の流れそれ自体を問題にするということも、これまで指摘されてきたところであるが、今でもなお、家族と学校を問題にする議論を人々は手放してはいない。

ここ数年の子どもを取り巻く変化の一つに、出生数の激減がある。少子化問題はすでに1990年代から私たちの馴染みのある問題となっているが、ここ数年の出生数の減少は、新たなフェーズに入ったともいえる。このような状況下において、子どもたちを支える子育て家族や学校はますます社会の中の少数派となっている。人々のまなざしは、相変わらず子育て家族と学校に固定され、いっそう家族と学校のあり方を問う議論を強化しているかのような現状がある。

このような現状を踏まえて、現代社会における現代の家族と学校の関係を問うプロジェクトが始められた。本ラウンドテーブルでは、その途中経過を報告する。

話題提供を行う報告者と発表題目は以下の通り。堀内かおる（横浜国立大学）「現代家族における性別役割分業を問い直す教育実践の可能性」、額賀美紗子（東京大学）「日本の学校における移民家族の疎外とその背景—文化的・制度的障壁に注目して」、加藤美帆（東京外国語大学）「不登校をめぐる親の検討—不登校後の進路形成と新自由主義」、西村純子（お茶の水女子大学）「親との離別と子どもの発達」、小玉亮子（大阪信愛学院大学）「幼児期の教育における家族と園との関係の再考」。当日は、参加者との意見交換によって議論を深めていきたいと考えている。

III プログラム

ラウンドテーブル 8月22日(土) 16:00~18:00

【8】 今改めてリテラシー・シティズンシップの概念を問う —デジタル・ユネスコ・生涯学習の視点から—

企画者/司会者: 前田 稔(東京学芸大学)

企画者/報告者: 坂本 旬(法政大学)

《趣 旨》

近年、日本を含め諸外国におけるデジタルと関わる教育活動は、徹底的な推進から転換点を迎えてつつある。国ごとに形成されてきた教育体系と、国際的なサイバー空間との有効な接点を見出していくために、理論と実践の前提となるあらゆる論点を俎上に載せる包括的な概念を見出す試みがなされてきた。例えば、このラウンドテーブルでは平成24年度より、メディア情報リテラシー教育、デジタルシティズンシップ教育などの最新トピックについて議論を重ねてきた。一方で、それらの概念が定まらないまま、デジタルトランスフォーメーション(DX)、デジタルリテラシー、ICTリテラシーといった言葉が錯綜した状況が続いており、議論の前提となる概念定義の不明確性を低減していく必要性が高い。

本ラウンドテーブルではまず、①それぞれの概念定義を試みる。歴史的展開を踏まえつつ、適応領域や特性について議論を行う。特に、平成25年度における当ラウンドテーブル「今改めてリテラシー概念を問う—多義性のなかでの核心—」における成果の一つである、「多元性」に重点を置きたい。それを踏まえ、②ユネスコを中心に進んでいる、「デジタル時代のグローバルシティズンシップ教育」の展開についてリテラシーの多元性に関わる理念・理論のみならず、各国の教育実践において何が期待されているかについての議論を深めていく。その際は、先進国だけでなく発展途上国まで視野に入れた国際的枠組みの動向に注目する。さらに、③生涯学習ないし成人教育の視点から、あるべき未来について対話する。サイバー空間には教育制度や校種、発達段階といった区切りは存在しない。世界中のあらゆる人々と、学びについての再構築が可能か否かについて議論を進めていく。

なお、事前に下記のウェブサイトにおけるユネスコと関わる最近の投稿を事前に閲覧しておくことを希望する。

坂本旬 note、<https://note.com/junsakamoto>

III プログラム

ラウンドテーブル 8月22日(土) 16:00~18:00

【9】 続・教員への道 (2)

— 「文検」「実検」「高検」の合格者の学びをめぐって—

企画者/司会者: 惟任 泰裕 (大阪成蹊大学)

企画者/報告者: 船寄 俊雄 (岡山商科大学・神戸大学名誉教授)

報告者: 宇賀神 一 (新潟大学)

内田 徹 (浦和大学)

亀澤 朋恵 (高田短期大学)

丸山 剛史 (宇都宮大学)

檉下 達也 (京都教育大学)

疋田 祥人 (大阪工業大学)

蓑毛 智樹 (大阪成蹊大学)

指定討論者: 井上 恵美子 (フェリス女学院大学)

《趣 旨》

日本教育学会第83回大会(2024年)のラウンドテーブルでは、2003(平成15)年度の日本教育史研究会第22回サマーセミナー「教員への道」の内容を継承しつつ、「続・教員への道: 教員検定試験研究の現代的意義をめぐって」という企画を立てた。そこにおいては、教員検定試験の合格者の学びの姿を掘り起こすことを教員検定試験研究の現代的意義の一つとした。今回のラウンドテーブルでも、上記の課題意識を引き継ぎながら、戦前期の各種教員検定(師範学校中学校高等女学校教員検定(以下、文検)、実業学校教員検定(以下、実検)、高等学校高等科教員検定(以下、高検))の合格者の学びについて報告し、指定討論者を交えた議論を行う。

まず、「文検」では、修身科を事例とする。とくに受験雑誌『教育修身研究』に掲載された座談会記事を手がかりに、合格者の学びの姿を分析する。受験者のために開かれた座談会では、勉強法や出題傾向の共有に加え、試験委員への批判も見られた。こうした語りから、合格者が「文検修身科」を通じた学びをどのように意識していたのかを捉える。

次に、「実検」では、商業ノ部を取り扱う。商業ノ部は、商事要項、簿記、商業英語などの学科目からなり、1922~43年までに5,000人以上が受験した。合格者808人の中には、例えば商事要項だけでなく、簿記にも合格した者がいた。また、商業英語合格者は雑誌の「添削欄」を学びのネットワークとして活用した。農業ノ部とは異なる学びの姿も報告する。

最後に、「高検」については図画科の学習実態を報告する。「高検」の図画科の試験は、絵画的要素は少なく、「用器画」(図学)に偏重した内容であった。わずかに残された受験体験

Ⅲ プログラム

記から、受験者はすでに中等教員として教壇に立つ傍ら、日頃から「用器画」の研究を重ねてきた者たちであったことがうかがえる。彼らが受験に際し、何を研究し、身に付けたのか。受験者の学びを検討する。

III プログラム

ラウンドテーブル 8月22日(土) 16:00~18:00

【10】 オランダにおける日本教育受容の一動向

一金森財団に着目して一

企画者/報告者: 辻 直人(和光大学)

上森 さくら(金沢大学大学院)

田村 真広(日本社会事業大学)

持田 洸(富山大学)

《趣 旨》

昨年度のラウンドテーブルでは、オランダの教師教育、教員研修プログラムの現状を中心に実態を分析した。オランダでは教育や教員の質をめぐるたびたび議論がなされてきた。同国憲法では「学校設立の自由」「教育理念の自由」「教育組織・方法の自由」及び「学校選択の自由」が保障されている。教育を2000年代に入ってからには学校の自律性強化・競争促進が進み、革新的アプローチな教育実践が増加する傾向が見られた。一方で教師の質としては「プロフェッショナリズムの回復志向」が見られ、教師自身の専門性や判断力を尊重すべきとの考えが強まっている。他方、PISAによる国際競争力低下への懸念も一部で見られ、「結果志向重視の仕事」の推進が重視されるような傾向も見られる。

一方の教育現場では、多くの教師が疎外感・不満・フラストレーションを持ち、教師から主体的に声を挙げアクションを取っていく動きも見られている。また、教師教育の質的向上を課題とする動きが国内で見られるようになった。中でも、教師がどれだけ子どもの内面に共感的であるか、子どもが互いを尊重し合い相互的強制的な関係を作れるかという考えのもとで、新たな教員研修の機会を作り出している団体がある。それが Stichting Kanamori (金森財団) である。金森とは石川県の元小学校教師金森俊朗のことであり、「いのちの授業」実践者として世界的に知られる。同財団は金森の教育論を土台とした教員研修を積極的に取り組んでいる。

報告者たちは2023年より定期的にオランダを訪問する機会を得、金森財団とも関わりを持ってきた。また、財団メンバーを通じて複数の教員養成機関を訪問し、金森教育論を具体的に自らの実践に取り入れている教師たちにも出会った。

今回の報告では、最新のオランダ教育事情で更に分かったこと、金森財団の動きとその動きと関連した教師教育の現状について紹介したい。(科研費課題番号: 25K05847)

Ⅲ プログラム

ラウンドテーブル 8月22日（土） 16：00～18：00

【11】 学会における倫理綱領の策定と運用をめぐる諸課題の検討

企画者／報告者： 小玉 重夫（白梅学園大学）

司会者： 広瀬 裕子（専修大学）

報告者： 辻 智子（北海道大学）

尾崎 博美（東洋英和女学院大学）

北仲 千里（広島大学）

《趣 旨》

日本教育学会はその倫理綱領において、会員に対し、教育学の研究・教育における倫理的な問題への自覚を強く促すとともに、基本原則として、研究・教育の実施、研究成果の発表、専門的意見の公表、ならびに学会運営において、つねに基本的人権に配慮しなければならないことを定めている。そして、教育学の研究・教育における倫理的な問題に対応するために設置された「日本教育学会倫理委員会」において、現在、倫理綱領の運用にあたって必要な規定、具体的には、ハラスメントや人権問題に関する相談対応のための細則の制定等を検討中である。

本ラウンドテーブルは、日本教育学会倫理委員会での上記の議論の現状を報告するとともに、他の学会や研究領域において同様の問題に取り組んでいる研究者からの報告を交えて、自由に意見交換を行う場として設定された。

本課題に関心を持つ多くの方の参加を期待したい。

Ⅲ プログラム

ラウンドテーブル 8月22日(土) 16:00~18:00

【12】 戦後初期の韓国における大学設立の諸相

—大学と地域の連携構想とその受容—

企画者／報告者： 日永 龍彦（山梨大学）

司会者／報告者： 石渡 尊子（桜美林大学）

報告者： 鄭 漢模（北海道大学）

《趣 旨》

本ラウンドテーブルは、科研費研究「戦後初期の大学・高校と地域の連携構想とその受容—日本・琉球・韓国の異同に着目して」の一環として、戦後初期の韓国における大学設立と地域社会との関係に焦点をあてるものである。本研究では、第二次世界大戦後、米国が何らかの形で統治に関与した旧日本帝国施政下地域において、米国型の大学改革モデルがどのように受容されたのかを比較史的に検討している。特に、大学の管理運営における理事会制度や学外者参加の構想、ならびに大学による地域貢献・普及活動を通じた地域社会との連携に注目してきた。企画者や発表者が取り組んできたこれまでの研究から、日本と琉球では、米国型改革モデルの受容に対照的な特徴がみられた一方、琉球においても日本復帰を志向する過程で、日本型の大学運営に近接していくことが明らかとなっている。そこで本ラウンドテーブルでは、米軍政期からその直後にかけての韓国を対象に、新設大学と地域社会との関係がいかに構想・受容されたのかを検討する。具体的には、①国立大学の管理運営における学外者（レイマン）の参加構想、②専門大学・女子大学による地域貢献や生活改善活動、という二つの側面を取り上げる。これを通じて、戦後東アジアにおける大学改革と地域社会との関係を比較史的に捉え直す契機としたい。

III プログラム

ラウンドテーブル 8月22日(土) 16:00~18:00

【13】 学力の共通根と様態の多様性

—国際的なフィールド調査と計量分析—

企画者／報告者： 田端 健人（宮城教育大学）

企画者／報告者： 本図 愛実（宮城教育大学）

司会者／報告者： 市瀬 智紀（宮城教育大学）

報告者： 平 真木夫（宮城教育大学）

指定討論者： 山田 美都雄（宮城教育大学）

《趣 旨》

学力とは何か。とりわけ日本の学校教育において学力とは何か。本ラウンドテーブルでは、この問いに、国内外の学力調査の計量分析とフィールドワークにより応答する。

学力調査の計量分析により、各教科の学力には共通の根、教科横断的な核のようなものが存在することを示す。この知見は、心理学で古くから提起されている「一般知能 (g 因子)」の議論と接続する。各教科の学力をセグメント化して捉える従来の見方に対し、学力には統合的な基盤があるという視点は、カリキュラム設計や学習支援のあり方を根本から問い直す契機となる。

また国際比較により、日本の学力がスコアとしては最上位にあるものの、持続可能性や包摂の観点からは課題があることを示す。PISA や全国学力・学習状況調査のデータは、社会経済文化的背景 (ESCS) や学習に向かう態度が学力形成に強く関与していることを示しており、学力の「共通根」が家庭・社会環境と深く結びついているという分析結果も示したい。

こうした課題を克服する実践の一つとして、本ラウンドテーブルではイギリス・ウェールズのフィールドワークを紹介する。ウェールズでは 2022 年に「Curriculum for Wales」が全面改訂され、教科横断的な「学びと表現の領域」を基盤とする統合的なカリキュラムが実施されている。ウェールズ語を媒介とした学校教育 (Welsh medium education) は、言語・文化的アイデンティティと教科学習を一体化させており、GCSE の学力成果においても注目される成果を示している。この実践は、学力の「共通根」を文化的文脈の中で育てるモデルとして、日本の学校教育に対する重要な比較参照軸となりうる。

III プログラム

ラウンドテーブル 8月22日(土) 16:00~18:00

【14】ポスト・ソビエト諸国における教育研究の decolonization と innovation

ーペレストロイカ期からの教育改革と教育研究動向の再検討ー

司会者／報告者： 澤野 由紀子（聖心女子大学）

企画者／報告者： タスタンベコワ クアニシ（筑波大学）

報告者： MISOCHKO GRIGORY（京都外国語大学）

黒木 貴人（福山平成大学）

木之下 健一（目白大学）

白村 直也（岐阜大学）

《趣 旨》

20世紀後半からアフリカや南米などの旧植民地に関する教育研究の視点として用いられてきた decolonization の概念は、近年、比較教育学界においてパラダイムの再検討を迫る重要な理論的視座として再び大きな注目を集めている。21世紀のポスト・ソビエト諸国の教育研究においても、ソ連時代の教育を再評価する研究者が専制的統治者との関係を強める一方で、decolonization（脱植民地主義）の概念を援用し、de-Sovietization（脱ソビエト；ソビエトの価値観・慣行・制度の脱構築）と脱西欧中心主義による新たな「知の生産」を目指し、高等教育や学術研究の改革の論拠とする研究が興隆している。Colonization の捉え方は各国の歴史・文化と政治・経済・社会の現状やナショナリズムの質によって相違があるが、最近の「知の生産」における新たな植民地主義（neo-coloniality）への教育研究者の対抗の姿勢には共通性もみられる。

本ラウンドテーブルでは、旧ソ連諸国の教育を coloniality の視点から見ることによって、ソ連時代からの教育政策・理論や教育実践の変遷をどのように捉え直すことができるのか、先行研究のレビューにもとづき検討したい。その際、旧ソ連を構成していた 15 共和国を coloniality の歴史的・文化的捉え方と近年の地域統合のベクトルの相違から、中央アジア諸国、コーカサス+諸国(民主主義と経済発展のための機構 GUAM 諸国とアルメニア)、バルト諸国(EU 加盟国)ならびにロシア・ベラルーシの4地域に区分し、それぞれの相違にも着目する。

Ⅲ プログラム

ラウンドテーブル 8月22日(土) 16:00~18:00

【15】 多様な学校と学校図書館

—特別支援学校と通信制高等学校における学校図書館の 現状と可能性を考える—

企画者： 木幡 洋子（愛知県立大学）
司会者： 泉山 靖人（東北学院大学）
報告者： 野口 武悟（専修大学）
 木幡 智子（岐阜女子大学）
 江良 友子（愛知学泉大学）
 野村 直志（岐阜県立華陽フロンティア高等学校）

《趣 旨》

令和の日本型教育を「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実により実現させることを、令和3年1月の中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」で示している。同答申では、ICT活用と学校図書館について「学校図書館における図書等の既存の学校資源の活用や充実を含む環境整備の在り方、校務の在り方や保護者や地域との連携の在り方、さらには教師に求められる資質・能力も変わっていくものと考えられる。」と、従来の学校図書館の意義は変わらず、ICT時代における学校図書館の整備と活用についての新たな視点と概念が求められることを述べている。これに対し、文部科学省が同年3月にまとめている「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」では、学校図書館については一切ふれられていない。これは理念と行政の間の齟齬で、実際の学校現場においては学校図書館を視野に入れない Society5.0 に向けた教育改革が進んでいるのか。本ラウンドテーブルでは、「個別最適な学び」を保障する学校として、特別支援学校と通信制高等学校をとりあげ、学校図書館の整備が遅れ、活用されていない実態を報告し、これらの学校における個別最適な学びにおいて学校図書館がどのような可能性を持っているかを参加者と考える。

III プログラム

ラウンドテーブル 8月22日(土) 16:00~18:00

【16】子どもとともに対話をひらく —コモンワールズ・ペダゴジーの観点による乳幼児の探究 プロセスの再解釈—

司会者／報告者： 浅井 幸子（東京大学）

企画者／指定討論者： 中村 絵里（千葉大学）

報告者： 佐野 良介（東京大学大学院）

森永 純子（お茶の水女子大学大学院）

松尾 杏菜（お茶の水女子大学）

荒木 楓（東京大学大学院）

福元 真由美（青山学院大学）

指定討論者： 藤谷 未央（和洋女子大学）

《趣 旨》

2023年度より東京都では「とうきょう すくわくプログラム」の事業が推進され、子どもたちと先生たちが園で探究に取り組んでいる。本ラウンドテーブルでは、東京大学 CEDEP が関与しているその事業のパイロットとして行われた探究の事例を、コモンワールズ・ペダゴジーの観点から再解釈し、子ども、保育、世界をめぐる問いと対話をひらくことを目指す。

コモンワールズ・ペダゴジーとは、複雑な現代社会において、子どもとともに「世界制作 (worlding)」「コモニング (commoning)」「継承 (inheriting)」に取り組むためのペダゴジー（教育の理論＝実践）である。「世界製作」と「コモニング」という言葉は、人間だけではない多様な種の異なる存在たちが、共に世界をつくる行為を意味している。そこにおける教育の役割は、世界を外から観察することを子どもに教えるのではなく、人間と非人間が共に世界を形づくるプロセスを支えることになる。「継承」の概念は、単に過去から何かを受け取ることではなく、過去と現在が絡み合う中で、自分たちがどのような責任を負い、どのように未来を紡いでいくのかを考える行為を意味している。

以上の観点から、子どもたちの探究プロセスを再解釈すると、その中で個の探究と集合的な探究がどのように交錯しているか、自然科学的なものと人文的なもの、社会科学的なものかどのように混在しているか、自然と子どもたちがどのように絡み合って存在しているかといったことが見えてくる。その姿からひらかれる問いを共有し、対話したい。

プログラム 第二日

8月24日（月）

（ハイフレックス開催）

課題研究Ⅰ

自由研究発表（対面発表部会①）

総会

日本教育学会奨励賞授賞式

公開シンポジウム

III プログラム

日本教育学会第 85 回大会 課題研究 I

8 月 24 日 (月) 9 : 00 ~ 12 : 00 (1 号館 2 階 S201 番教室 & オンライン)

AI 時代における教育知の社会的生成と共有に向けて

— 「AI を育てる」条件と可能性を探る—

【企画趣旨】

各国で生成 AI の教育利用 (教育 AI) が急速に進展し、授業設計、評価、個別支援など、これまで生身の教師 (ヒト教師) の専門的判断に委ねられてきた実践上の判断に教育 AI が関与し始めている。TALIS 2024 の調査結果や諸外国の教育実践報告によれば、欧米諸国では学校への教育 AI の導入が進む一方、日本では慎重な姿勢がみられつつも活用への期待も高まっている。元来、AI (大規模言語モデル) は学習されたデータに基づき知識を生成するために、自らが訓練された知識環境が属する文化を反映する。それゆえ、諸外国の大量の教育実践に基づいて生成された教育 AI の応答には前提となる教育観や判断基準に一定の傾向を含みうる (国産教育 AI の必要性)。

これに対して、教育学では教育実践における判断 (教育判断) を学校制度、教師と生徒の関係、評価観、学習観など社会的文脈に依拠して理解してきた。すなわち、各国における教育判断は、その国に適應する研究知見・制度規範・教師の経験という複数の要素の関係の中で成立してきた。教育 AI の導入は、このような文化 = 文脈依存環境に、一見すると文化が捨象された環境で「育った」AI との同居が始まることを意味する。さらに、確率論的に生成された知識分布を教育判断の根拠としてどのように位置づけるかは、単なる技術活用の問題ではなく、教育知の生成と共有の在り方に関わるきわめて本質的な教育学的問題である。とりわけ、日本の教育実践に関する記録や判断過程をどのように蓄積し、検討可能な形で共有し得るのかは、AI 時代の教育の基盤を左右する論点となる。このような視点に立つとき、ヒト教師の教育判断そのものの再検討に向かうことも必要となる。

研究課題 I では、AI の是非や効果を問うのではなく、「教育判断の根拠はどこに置かれるのか」を中心的争点とする。まず、AI の専門家から AI の開発状況について俯瞰していただく。それを受けて、認知科学の専門家は子どもたちの学習成立の観点から判断の形成過程を、教育工学・教育方法学の専門家は学校現場における教師の役割、授業の分担と設計および教育実践データの収集を、教育社会学の専門家はヒト教師と教育 AI の教育判断の相違点と課題および相互啓発の可能性を、教育哲学の専門家は判断の正当化原理である学習の本質と創造性・批判的思考の育成を検討する。

これらの議論を通じ、教育 AI との対比においてヒト教師の専門性はどのように再定義されるのか、また日本固有の教育 AI の開発という命題の下、「AI を育てる」条件やその是非を考察していきたい。テーマの新規性に対応し、各分野 5 名の報告に続き、パネルディスカッションで分野間の対話を通じて基礎研究と社会実装の相互関係を深める。

III プログラム

報告者

松林 優一郎（東北大学）

高橋 麻衣子（早稲田大学）

藤村 裕一（鳴門教育大学）

山本 宏樹（大東文化大学）

鈴木 篤（九州大学）

司会

柏木 智子（立命館大学）

張 揚（北海道大学）

Ⅲ プログラム

自由研究発表【C】 8月24日(月) 9:00~12:00 (1号館2階 N201番教室)

【一般 C-1】 対面発表部会①

司会： 藤田 雄飛 (九州大学)

高妻 紳二郎 (福岡大学)

- 9:00~9:30 教育を技術的に理解するとは何か
—ユク・ホイの宇宙技芸論を手がかりに—
○于 旻崢 (広島大学)
- 9:30~10:00 野口援太郎の自治構想
—明治30年における寄宿舎改革論との比較—
○塚本 香奈 (慶応義塾大学大学院)
- 10:00~10:30 学校運営における子どもの意見表明の実態と制約要因
—中学校教員へのインタビュー調査と M-GTA 分析
を通して—
○郡司 日奈乃 (千葉大学大学院)
- 10:30~11:00 児童期のリーダーシップの特徴
○紀村 修一 (広島大学大学院)
- 11:00~11:30 教員が「特別扱い」を正当化する説明実践
—形式的平等規範との折り合いのつけ方に着目して—
○秋山 みき (大阪大学大学院)
- 11:30~12:00 討論

III プログラム

総会・日本教育学会奨励賞授賞式

8月24日(月) 13:00~14:50 (1号館2階 S201 番教室)

総会

日本教育学会奨励賞授賞式

総会は、九州産業大学1号館S201番教室およびオンライン会議システムZoomによるハイフレックス形式で開催します。総会の議事次第と資料、Zoom URLは、8月中旬ごろに、会員マイページ (<https://service.gakkai.ne.jp/solti-asp-member/mypage/JERA>) でお知らせします。ご確認ください。

なお、すべての審議事項の終了後に、日本教育学会奨励賞 (Young Scholar Award JERA 2026) の授賞式を行います。

日 時 : 2026年8月24日(月) 13:00-14:50

開催方法 : 現地会場(対面)とオンラインZoomのハイブリッド

III プログラム

日本教育学会第 85 回大会 公開シンポジウム

8月24日(月) 15:15~18:15 (1号館2階 S201 番教室&オンライン)

東アジアとグローバル教育ガバナンス

企画趣旨

近年、教育政策をめぐる国際的な議論は、OECD やユネスコに代表される国際機関の主導にとどまらず、アジア諸国を含む多様なアクターが相互に影響し合うことで、多極的で重層的なガバナンス構造を呈している。東アジアでは、中国・韓国の存在感が着実に増し、たとえば韓国が推進するグローバル・シティズンシップ教育(GCED)は、複数の国・地域のカリキュラムや政策議論に具体的な変化を促してきた。他方、日本はESD(持続可能な開発のための教育)を先導してきた歴史を有するものの、近年は相対的な発信力の低下が指摘される。加えて、国際秩序の不安定化や地政学的緊張の高まりは、教育協力のあり方やガバナンスの設計に直接的な制約と再編圧力を与えている。

本シンポジウムは、このような「グローバル教育ガバナンス」の変容を踏まえ、東アジアの位置づけと日本が果たし得る役割を多面的に検討する。具体的には、①グローバル教育ガバナンスの理論枠組みと国際動向、②ユネスコ等の国際機関および中国・韓国の政策の影響力、③日本型教育の国際発信と今後の方向性を射程に収めたうえで、韓国の平生(社会)教育がグローバル・レベルで果たす役割と影響を通じて社会教育・生涯学習の観点から政策拡散と受容過程を検討し、さらに教育方法学からの視点を手がかりに、学校現場由来の実践知がどのように国際的に移植・再文脈化され、日本発の影響がいかなる形で評価・再構成されているのかを明らかにする。これら二つのコメントリーの視角を、各報告と接続させることで、外部アクターと国内実践を結ぶ支配—合意—適応の力学を具体的に描き出し、東アジア文脈に基づく新たな教育スタンダードの可能性と、日本の戦略的関与の方向性を展望するための知的基盤の共有を目指す。

報告者

橋本 憲幸(山梨県立大学)

望月 要子(香港教育大学)

高山 敬太(オーストラリア・アデレード大学)

コメンテーター

梁 炳贊(ヤン・ピョンチャン)(韓国・公州大学校)

柴田 好章(名古屋大学)

III プログラム

論点整理

Edward Vickers (九州大学・ユネスコチエア)

司会・モデレーター

陳 思聡 (九州大学)

花井 渉 (九州大学)

企画者

花井 渉

陳 思聡

岡 幸江

Edward Vickers (九州大学)

プログラム 第三日

8月25日(火)

(ハイフレックス開催)

課題研究Ⅱ

自由研究発表(対面発表部会②)

課題研究Ⅲ

自由研究発表(対面発表部会③)

若手交流会

III プログラム

日本教育学会第 85 回大会 課題研究 II

8 月 25 日 (火) 9 : 00 ~ 12 : 00 (1 号館 2 階 S201 番教室 & オンライン)

幼児教育における公正とは何か

— 教育における公正を出発点から問い直す —

(* 本セッションの使用言語は英語であるが、オンラインシステムを利用して同時通訳も取り入れる。)

【企画趣旨】

課題研究 II では、教育における社会正義・公正性 (Social Justice and Equity) という、日本教育学会において継続的に議論されてきた理論的課題を、幼児期という教育の出発点から問い直す。これまで日本の教育研究は、主として学校教育を中心に展開されてきた。一方で、生涯にわたる学びや人格形成の基盤が育まれる乳幼児期については、保育学、発達心理学、小児医学、福祉などの隣接領域に分節化され研究が蓄積されてきたものの、教育学の中核的課題としては、必ずしも十分に位置づけられてきたとは言い難い。しかし、教育における不平等や格差は学校段階で初めて生じるものではなく、それ以前の生活経験や育ちの環境、教育・ケアへのアクセスの違いによって形成される側面が大きいことが、近年の国内外の研究によって明らかになりつつある。さらに、気候変動やグローバル化、テクノロジーの急速な進展、多文化化の進行など、子どもを取り巻く社会環境は大きく変容している。家族や地域社会のあり方、子どもの遊びや他者との関わり、学びの環境そのものが変化するなかで、幼児期の育ちを支える条件にも大きな揺らぎが生じている。このような状況のもと、公正とは何を保障することなのか、誰にとっての公正なのか、そして教育はその実現に向けてどこから構想されるべきなのかという問いが、あらためて教育学の重要課題として浮上している。

そこで本課題研究では、幼児期を学校教育の準備段階や教育研究の周縁的テーマとして扱うのではなく、子どもの権利と尊厳が保障される教育の出発点として捉え直す立場から、この問いに向き合う。国際基調講演には、創造性・多様性・包摂性をめぐる理論と実践を横断する研究を長年にわたって展開してきた教育学者であり、学校教育の枠を超えた創造的な学びの環境や、異なる背景を持つ子どもたちの声を教育実践にいかに関与させるかという問いに対して、国際的な知見をお持ちであるケンブリッジ大学の Pamela Burnard 教授をお招きする。この視座は、幼児教育における公正を捉え直す上で示唆に富む出発点となる。基調講演を受けて、まず科学的知見から乳幼児期の重要性を示した上で、幼児教育における公正を保障するとはどういうことかを、子どもの権利、教育政策、国際比較、実践の視点から多角的に検討する。本課題研究は、幼児教育という領域に閉じるのではなく、多様な専門領域との対話を通して、日本の教育研究において幼児教育が果たしうる理論的・実践的な役割を問い直す試みとして位置付けたい。それと同時に、学校教育を中心に構築されてきた日本の教育学の問いの射程を、教育の出発点から再考する

III プログラム

ことを目指す。

国際基調講演

Pamela Burnard (University of Cambridge)

登壇者

成田 奈緒子 (文教大学)

丹伊田 真央 (東京大学)

Daniel Ferguson (George Mason University)

司会

近藤 真子 (文教大学)

高橋 哲 (大阪大学)

What Does Equity Mean in Early Childhood Education? — Rethinking Equity from the Foundation of Education —

(*The session)

This international session reconsiders the theoretical challenge of Social Justice and Equity in Education—a topic that has been continuously debated within the Japan Educational Research Association (JERA)—from the perspective of early childhood education (ECE) as the starting point of education. Educational research in Japan has primarily focused on elementary and secondary schooling. In contrast, early childhood—the period during which the foundations for lifelong learning and human development are established—has largely been addressed within adjacent fields such as early childhood education and care, developmental psychology, pediatrics, and social welfare, rather than being positioned as a central concern of educational research.

Recent national and international studies increasingly demonstrate that disparities in early childhood education, care environments, and life experiences have profound and long-term effects on children's later learning opportunities, development, and well-being. At the same time, rapid social transformations—including climate change, globalization, technological advancement, and increasing cultural diversity—are reshaping the environments in which children grow and learn. As family structures, local communities, children's play, social relationships, and learning environments continue to change, the conditions supporting early childhood development have become increasingly unstable.

Against this backdrop, fundamental questions have re-emerged as central concerns for educational research: What constitutes equity in early childhood education? Why does early childhood matter for educational justice? And from where should a more equitable education system be envisioned?

Rather than treating early childhood as a peripheral topic or merely as preparation for formal schooling, this session approaches it as the foundational stage at which children's rights and dignity should be recognized and protected.

The session begins with an international keynote address by Professor Pamela Burnard (University of Cambridge), whose work on creativity, inclusion, ethical response-ability, and equitable learning environments offers new perspectives for rethinking educational justice in

III プログラム

contemporary societies. Building on this keynote, the session brings together insights from pediatric neuroscience, children's rights studies, educational philosophy, and creativity research through an interdisciplinary and international dialogue on equity in early childhood education. By connecting these perspectives, the session seeks to explore how educational justice and equity might be reimagined from the foundation of education.

International Keynote Speaker :

Pamela Burnard (University of Cambridge)

Designing Equitable Learning Environments: Creativity, Inclusion, and Ethical Responsibility

Panelists :

Naoko Narita (Bunkyo University) : Biological and developmental foundations: *Why does early childhood matter?*

Mao Niida (The University of Tokyo) : Raising the fundamental question: *What should equity guarantee?*

Daniel Ferguson (George Mason University) : Institutional Structures and Educational Transitions: *Where does inequity emerge?*

Moderators:

Shinko Kondo (Bunkyo University)

Satoshi Takahashi (The University of Osaka)

Ⅲ プログラム

自由研究発表【C】 8月25日(火) 9:00~12:00 (1号館2階 N201番教室)

【一般 C-2】 対面発表部会②

司会： 楊 川 (九州産業大学)

木下 寛子 (九州大学)

- 9:00~9:30 教育委員はいかにジェンダー平等を議論してきたか
—教育委員会会議の議事録分析を中心に—
○酒井 秀翔 (東京大学)
- 9:30~10:00 学校と地域の関係性の再検討
—実践共同体概念を手がかりに—
○福井 美空 (九州大学大学院)
- 10:00~10:30 学校改革の主体としての「変革的エージェンシー」の形成
—チェンジラボラトリーによる校内研修改革とその
影響—
○朝倉 恵 (関西大学大学院)
- 10:30~11:00 近代学校の儀礼空間における植物・鉢植え
—装飾としての、あるいは権威の象徴としての—
○横山 詢 (東京大学)
- 11:00~11:30 児童による教師権力のパロディ化
○古池 伶美 (千葉大学大学院)
- 11:30~12:00 討論

III プログラム

日本教育学会第 85 回大会 課題研究Ⅲ

8月25日(火) 13:00~16:00 (1号館2階 S201 番教室&オンライン)

エビデンスの多元性に教育学の方法論はどう向き合うか

—規範・定量・定性の補完性—

【企画趣旨】

教育を定量的エビデンスに基づいて議論すべきであるとの機運が高まっている。エビデンスに基づいて教育研究が展開されることを EBE (Evidence-Based Education) と呼ぶ。そこには、教育政策と教育実践の両方が含まれ、政策の側面に焦点づけられるものが EBPM (Evidence-Based Policy Making) と呼ばれる。教育研究においてエビデンスが重視される背景には、その議論の方向性が政策関係者や現場教師による個別の定性的エピソードに基づいて為されていくのを避けるべきだという価値を前提としている。

政策科学における EBPM の発想は「エビデンスに基づく医療」(Evidence-Based Medicine : EBM) に由来しているとされる。医師が自身の経験だけに基づいた治療を行えば、誤診などの医療ミスが発生することが危ぶまれる。そこで医療における臨床試験の結果データを重視し蓄積することで、その後の誤診を減らしていける。EBPM は、この発想を政策研究に応用している。

そしてエビデンスには、因果推論のレベルによって順位付けされており、より実験的手法に近い研究方法によって導出された知見ほど“優れた”ものとされる。社会科学の研究において、それを叶える最上とされるのがランダム化比較試験(Randomized Controlled Trial : RCT)である。

しかし、RCT による知見が蓄積されれば教育が“良くなる”というエビデンスがあるわけではない。定量的エビデンスは確かに必要ではあるが、教育における規範的側面、教育現場から得られる現場知 (local knowledge) も同様に重要である。

教育研究では、「規範 vs.実証」、「定量研究 vs.定性研究」、「エビデンス vs.エピソード」などのような対立がしばしば見られる。しかし、政策科学や科学論の観点を踏まえれば、こうした対立軸はそれほど大きな意味をなさない。重要なのは、あくまで教育の改善に資する研究成果を得ることである。

研究課題Ⅲでは、“正しい”エビデンスをめぐる議論するのではなく、今後の教育学の方法論について議論してみたい。報告者には、規範・定量・定性のそれぞれの観点から研究課題を報告してもらい、科学論の観点から論点を整理する。こうした作業を通じ、今後の教育学における方法論について理解を深めたい。

報告者

杉田 浩崇 (広島大学)

神林 寿幸 (明星大学)

栗原 和樹 (専修大学)

III プログラム

指定討論者

松村一志（大阪大学）

司会

中西啓喜（桃山学院大学）

Ⅲ プログラム

自由研究発表【C】 8月25日(火) 13:00~16:00 (1号館2階 N201番教室)

【一般 C-3】 対面発表部会③

司会： 佐藤 仁 (福岡大学)

竹熊 尚夫 (九州大学)

- 13:00~13:30 教員採用試験「合格辞退率」が高いのはどの自治体か
—全国68実施主体への調査に基づく検討—
○服部 豪 (名古屋大学大学院)
- 13:30~14:00 「大学以外の場」における教員養成の成立要件に関する制度的検討
—指定教員養成機関を事例として—
○小椎葉 大樹 (九州大学大学院)
- 14:00~14:30 イギリス2014年版ナショナル・カリキュラム歴史科の分析
○菅尾 英代 (京都光華大学短期大学部)
- 14:30~15:00 中国の中学校「道徳と法治」教科書におけるマイノリティ
—表象の特徴—少数民族を中心に—
○WANG YIREN (明治大学大学院)
- 15:00~15:30 韓国における大学入学金廃止の政策形成過程
—キングダムの政策の窓モデルによる分析—
○多胡 太佑 (北海道大学 日本学術振興会)
- 15:30~16:00 討論

III プログラム

若手交流会 8月25日(火) 16:15~18:15 (1号館2階 S201番教室&オンライン)

若手育成委員会主催 若手交流会

アーリーキャリア期の不安と期待 —2040年の大学を見据えて—

【企画趣旨】

本企画はアーリーキャリア期の不安と期待について、参加者間で意見交流することを目的としています。国立/私立での勤務経験がある大学教員2名の話題提供をもとに、研究職のアクチュアリティから着任前後の不安や期待、目指すべき方向等について自由に議論しましょう。大学進学者数の激減が見込まれる“2040年問題”も見据え、大学の未来を考える場になればと考えています。

【話題提供】 江口 怜 (摂南大学)
今井貴代子 (大阪大学)

【指定討論】 大内 裕和 (武蔵大学)

【司会】 西野 倫世 (滋賀大学)

【スケジュール】

■第1部 全体会■

16:15-16:20 開会・趣旨説明

16:20-16:50 話 題 提 供

16:50-17:00 指 定 討 論

■第2部 グループディスカッション■

17:05-18:05 グループごとに議論・交流

18:05-18:15 総括・閉会

【開催方法】

対面およびオンライン (Zoom) のハイフレックス形式で開催

※オンラインでご参加予定の方は、右の二次元コードより

【8/24(月)】までに参加申し込みをお願いします

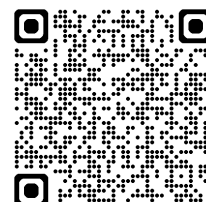
(対面参加は申し込み不要です。会場まで直接お越しください)

※第2部グループディスカッションについて

大会会場(対面参加)はコーディネーターあり

オンライン会場(オンライン参加)はコーディネーターなし

(ブレイクアウトルームで各自議論)



日本教育学会 若手育成委員会 企画

日本教育学会 第85回大会 ア－リーキャリア期の 不安と期待



参加無料

キャリア・年齢にかかわらず、
どなたでもご参加いただけます。
お気軽にご参加ください！

－2040年の大学を見据えて－

大会会場

九州産業大学と



Zoomのハイブリッド開催

2026

8

25

火

16:15 ▶▶ 18:15



※第2部グループディスカッションについて
大会会場はコーディネーターあり
オンライン会場はコーディネーターなし(ブレイクアウトルームで各自議論)

企画趣旨

本企画はア－リーキャリア期の不安と期待について、参加者間で意見交流することを目的としています。国立／私立での勤務経験がある大学教員2名の話題提供のもとに、研究職のアクチュアリティから着任前後の不安や期待、目指すべき方向等について自由に議論しましょう。大学進学者数の激減が見込まれる“2040年問題”も見据え、大学の未来を考える場になればと考えています。

登壇者	摂南大学 専任講師	江口 怜 氏
	大阪大学 特任講師	今井 貴代子 氏
指定討論	武蔵大学 教授	大内 裕和 氏
司会	滋賀大学 准教授	西野 倫世 氏

第1部 全体会

- 16:15 ▶ 16:20 開会・趣旨説明
- 16:20 ▶ 16:50 話題提供
- 16:50 ▶ 17:00 指定討論



第2部 グループディスカッション

- 17:05 ▶ 18:05 グループごとに議論・交流
- 18:05 ▶ 18:15 総括・閉会

スケジュール

お申し込みについて

URLまたは二次元コードより
お申し込みください。

8月24日月メ切

URL : <https://forms.gle/5koovZrMCyRSXUk8>
※大会会場からの参加は申込不要！会場まで直接お越しください。



お問い合わせ先

日本教育学会 若手育成委員会 wakate@jera.jp

主催：日本教育学会 若手育成委員会

IV 学会事務局からのお知らせ

IV 学会事務局からのお知らせ

日本教育学会 特別課題研究・課題研究委員会・地区研究活動 報告書・資料集頒布のお知らせ

○特別課題研究

101	教育改革の総合的研究 第1集	[2001年8月]	500円
102	教育改革の総合的研究 第2集	[2002年8月]	500円
104	教育改革の総合的研究 第4集	[2004年8月]	800円
203	教師教育の再編動向と教育学の課題 研究集録〈2〉	[2006年8月]	500円
301	教育改革の国際比較	[2007年9月]	3,400円
302	教育研究における東アジアの歴史認識	[2009年8月]	500円
303	東アジアの教育－その歴史と現在－（資料集）	[2011年8月]	500円
304	東アジアの教育－その歴史と現在－（最終報告書）	[2012年8月]	500円
305	現職教師教育カリキュラムの教育学的検討	[2012年9月]	500円
309	東日本大震災と教育－原発・エネルギー問題の教育実践課題を中心として－	[2013年2月]	無料
401	スクール・セクハラ問題の総合的研究	[2017年5月]	500円

○課題研究委員会

D-2	「人間の尊厳と共生」の教育研究（平和教育・環境教育資料付）	[2002年8月]	500円
-----	-------------------------------	-----------	------

○地区研究活動

東北-11	新しい時代の学校システムを考える －教育のグローバル化への国際バカロレア(IB)の可能性－	[2017年3月]	300円
東北-12	新しい時代の学校システムを考える－大学と地域連携の新たな課題－	[2018年3月]	300円
東北-13	新しい時代の学校システムを考える－大学入試改革の理念と実態－	[2019年3月]	300円
東北-14	新しい時代の学校システムを考える－戦間期の教育政策変容から現代を問う－	[2020年3月]	300円
東北-15	新しい時代の学校システムを考える－教育と福祉の連携を問い直す－	[2022年3月]	300円
東北-16	新しい時代の学校システムを考える－『令和の日本型学校教育』における教員研修の再検討－	[2023年3月]	300円

IV 学会事務局からのお知らせ

- 東北-17 新しい時代の学校システムを考える—小規模特認校制度の可能性と課題を問う—
[2024年3月] 300円
- 関東-1 学校での人権侵害としてのセクシャル・ハラスメントをどう防ぐか [2006年8月] 300円
- 関東-2 教育学 meets クィア・スタディーズ—<大学教育とクィア>に関する諸課題を考える—
[2008年3月] 300円
- 関東-3 中学生・高校生のセクシュアル・マイノリティの子どもたちと教育に関する研究・実践動向／
男女共学制下のジェンダー平等教育—北関東諸県を中心に—
[2009年8月] 300円
- 関東-4 シンポジウム「環境教育の新たな展開と課題」 [2011年6月] 300円
- 関東-5 教員養成において教育学教育の果たす役割 [2012年8月] 300円
- 関東-6 スクール・セクハラ問題と教育学の課題 [2013年3月] 300円
- 関東-7 見えない学力格差の是正—子どもの放課後の学びの支援— [2014年5月] 300円
- 関東-8 学校教育とセクシュアリティ問題—多様な性と教育にどう向き合うか—
[2017年7月] 300円
- *関東-2, 9は複写で頒布。次ページ参照。
- 東京-4 シンポジウム「教師教育改革を問い直す」 [2019年8月] 300円
- 中部-1 教養と学力 [2011年6月] 350円
- 近畿-8 災害の記憶と教育—阪神・淡路大震災の想起と追想をめぐる討議—
[2013年7月] 300円
- 近畿-9 私の教師生活4—戦後教育実践に学ぶ— [2017年8月] 300円
- 近畿-10 私の教師生活5—戦後教育実践に学ぶ— [2018年6月] 300円
- 近畿-11 特別支援教育の現場における保護者と学校のズレはどこから生まれるのか？
[2019年4月] 300円
- 近畿-12 私の教師生活6—戦後教育実践に学ぶ— [2019年8月] 300円
- 中国-9 全国学力調査を教育の改善にどう生かすか／教育研究の細分化は何をもたらしたか
(公開シンポジウム・研究会 成果報告書) [2008年4月] 300円
- 中国-11 リスク社会の捉え直しと教育の課題 [2013年7月] 300円
- 中国-12 次世代の教師を育てる教員養成関連授業の可能性—教育学と教科教育学の対話と協働—
[2015年8月] 300円
- 中国-13 社会保障と教育の接続をめぐって [2018年3月] 300円
- 四国-11 「日常」と教育理論—教育学的「実験」国家としての旧東ドイツ [2017年6月] 300円
- 四国-12 シンポジウム報告書「教員養成改革の方向性」 [2017年6月] 300円
- 中国・四国-1 教育格差と教員養成の課題 [2020年4月] 300円
- 中国・四国-2 学校の日常が突然に引きはがされたとき

IV 学会事務局からのお知らせ

- 戦争、自然災害、パンデミック下の学校教育— [2021年3月] 300円
中国・四国-3 ポストコロナの教育を展望する [2021年11月] 300円
- 中国・四国-4 SDGs時代の教育
—教育・学習における変革・変容(transformation)にどう向き合うか—
[2021年3月] 300円
- 中国・四国-5 子どもの多様性を包摂する保育・教育をめざして
[2023年11月] 300円

○そのほか資料コピー

以下の資料は冊子が在庫切れのため、1枚10円で資料コピーを頒布いたします。

- 複写-1 「戦後教育学の遺産」の記録(資料集No.1) [2013年8月] 610円
(61枚)
- 複写-2 <日本教育学会・公開シンポジウム>原発事故・放射能被災を学校教育はどう受け止めるか
[2014年3月] 690円(69枚)
- 複写-3 東日本大震災と教育に関する研究(全体編その1)
—子ども、園・学校は津波被災と原発災害にどう向きあったか、向きあっているか—
[2014年3月] 1,730円(173枚)
- 複写-4 「戦後教育学の遺産」の記録(資料集No.2) [2014年8月] 570円(57枚)
- 複写-5 東日本大震災の大津波被災とその後を子ども・教師・学校はどう生きているか
[2015年1月] 420円(42枚)
- 複写-6 養護教諭が体験した東日本大震災
—地震と津波発生時、避難所運営と避難者ケア、学校再開後の子どもたちのケアと教育—
[2015年2月] 440円(44枚)
- 複写-7 東日本大震災とそれ以降における教育委員会や学校の状況に関する調査報告書
[2015年3月] 870円(87枚)
- 複写-8 東日本大震災と教育に関する研究(全体編その2)
—「3.11」以降の子ども・教師・学校の経験と実践・支援・政策・研究の課題—
[2015年3月] 2,510円(251枚)
- 複写-9 「戦後教育学の遺産」の記録(資料集No.3) [2015年8月] 480円(48枚)
- 複写-11(関東-9) 平和教育研究のこれまでとこれから—日本教育学会の役割を考える—
*SOLTIの会員マイページで無料公開中 [2023年5月] 220円(22枚)

IV 学会事務局からのお知らせ

【申し込み方法】

- ・ 下記申込先まで、E-mail または Fax にて希望する冊子の番号・記号と送付先住所をお知らせください。報告書送付時に、代金と送料実費をご請求しますので、郵便振替にてご送金ください。なお、請求書類が必要な場合は、申し込み時に種類と書式等をお知らせください。
- ・ このリストは 2026 年 6 月現在のものです。

申込先：日本教育学会事務局

電 話：03-3253-6630 Fax：03-3254-0477 E-mail：jimu@jera.jp

住 所 〒101-0041 東京都千代田区神田須田町 2-15-2 クレアール神田 102

日本教育学会第 85 回大会プログラム

2026 年 8 月 22 日、24 日、25 日
大会校 九州大学・九州産業大学